

特46-810



1200500894642

特46

810

少年日露戦史

16 凱旋の巻

国立国会図書館

Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

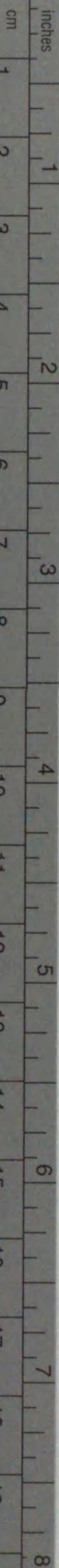
Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



少年日露戦史

第十六編
凱旋の巻

附

軍國讀本第十六

巖谷小波編



220
579

博文館發行

特46
810

巖谷小波編



少年自露戰史

第拾六編

凱旋の卷

附軍國讀本

卷の拾六

東京博文館



凡例

一少年日露戦史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戦争を書いた本であります。

一附録軍國讀本は、日露戦争に關係した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

少年日露戦史 第十六編

凱旋の巻目次

口繪

- 北韓軍の司令部 ● 日露の兩全權
- 第二軍凱旋 ● 浦港の風景

本文

- 第一章 沿海州の偵察……………一
- 第二章 北韓軍の活動……………四
- 第三章 洪水中の滯陣……………一〇
- 第四章 會寧方面の攻撃……………一五
- 第五章 平和風の由來……………二二
- 第六章 兩國の媾和委員……………二七
- 第七章 我が媾和條件……………三二
- 第八章 媾和の難關……………三七
- 第九章 媾和の成立……………四四
- 第十章 國民の激昂……………四九
- 第十一章 大廟御參拜……………五五
- 第十二章 滿洲軍の凱旋……………六三

附録軍國讀本 卷の十六

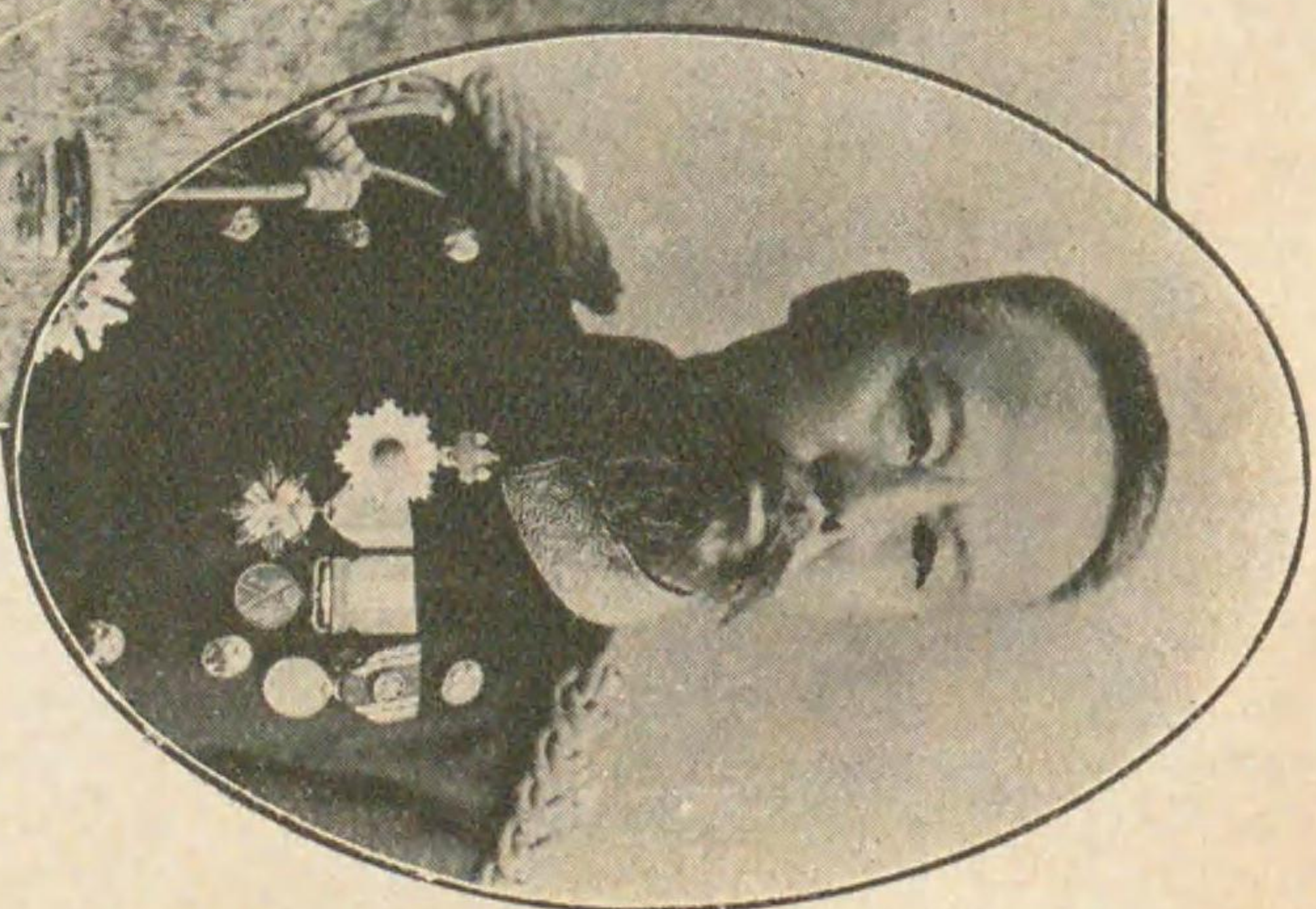
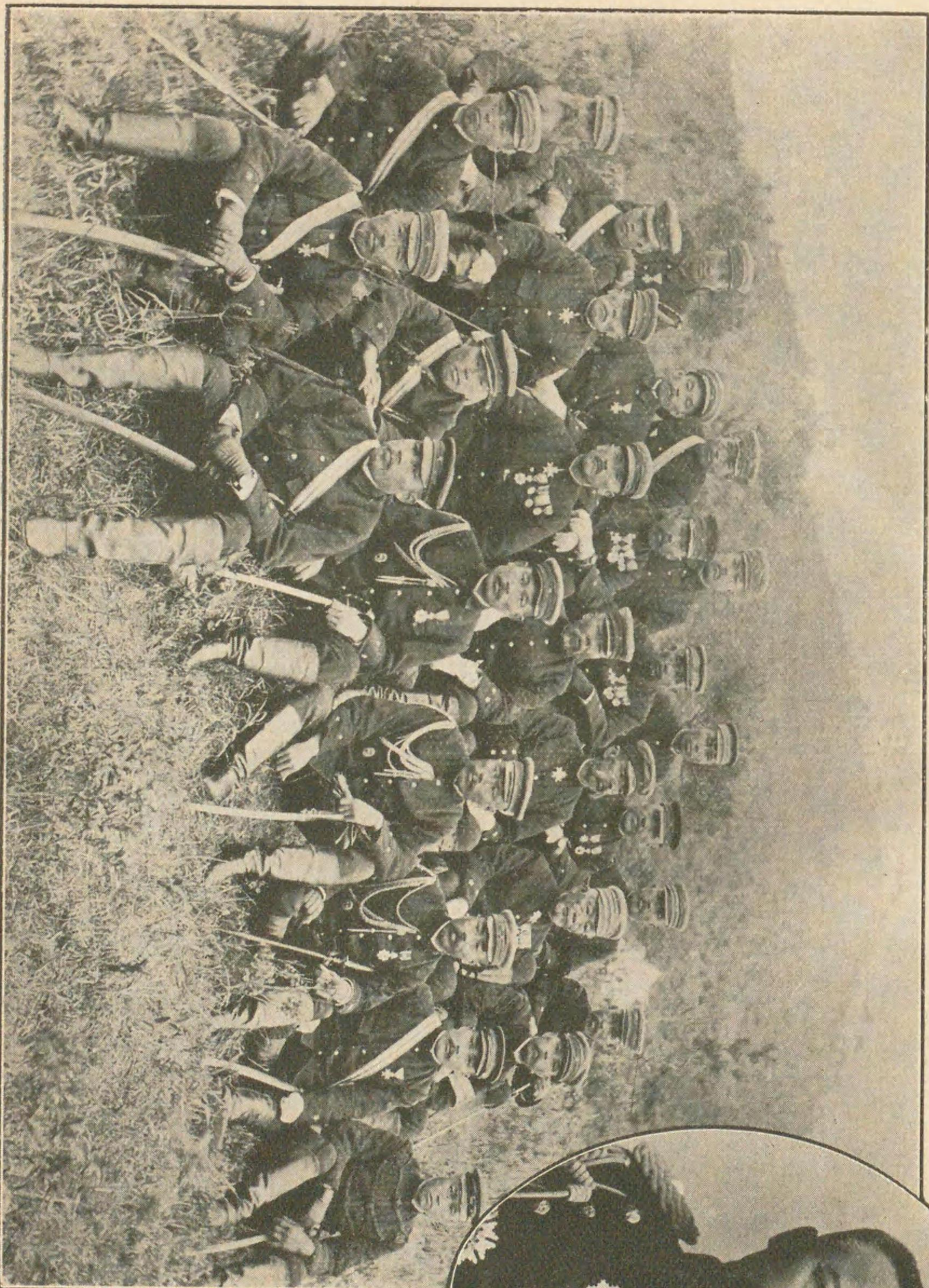
目次

- 一 御聖德の一斑……………一
- 二 小村全權大使……………九
- 三 韓國統監……………三
- 四 噫廉潔將軍……………六
- 五 凱旋土産の怪獸……………八
- 六 東郷大將の德望……………三
- 七 寺崎上等兵水中の働き……………二
- 八 凱旋の歌……………三

挿畫

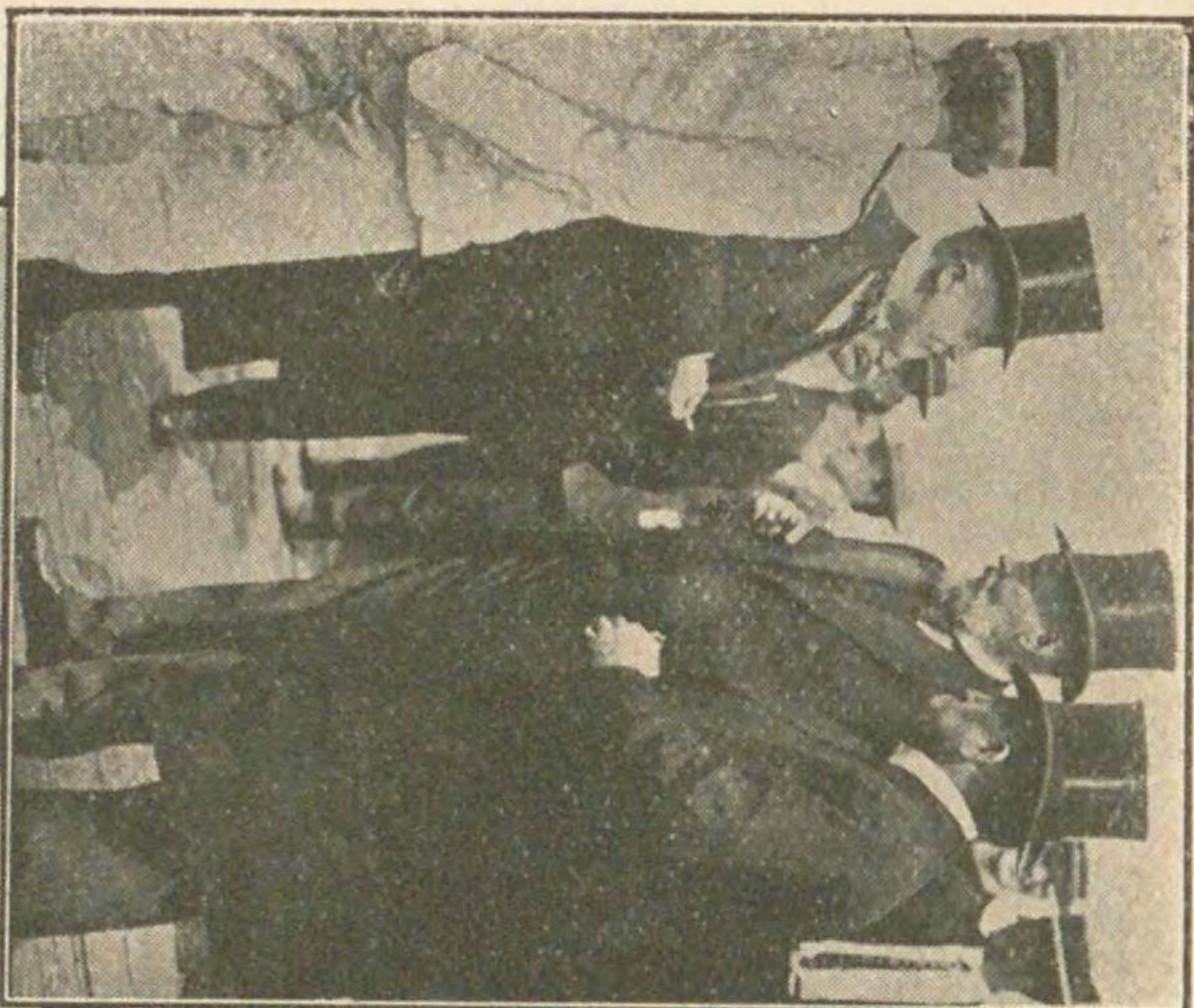
- ▲ ポースマウスの談判……………八
- ▲ 日英同盟の祝宴……………一六
- ▲ 大觀艦式……………二四
- ▲ 伊勢行幸……………三三
- ▲ 東郷大將大廟の參拜……………四〇
- ▲ 大山元帥の凱旋……………五〇
- ▲ 陸軍歡迎會……………六〇
- ▲ 伊藤韓國統監……………六一
- ▲ 乃木少尉募標の漂着……………六六
- ▲ 山猫退治……………七一
- ▲ 東郷大將の同情……………七四
- ▲ 上野の凱旋門……………八三

北 韓 軍 の 司 令 部

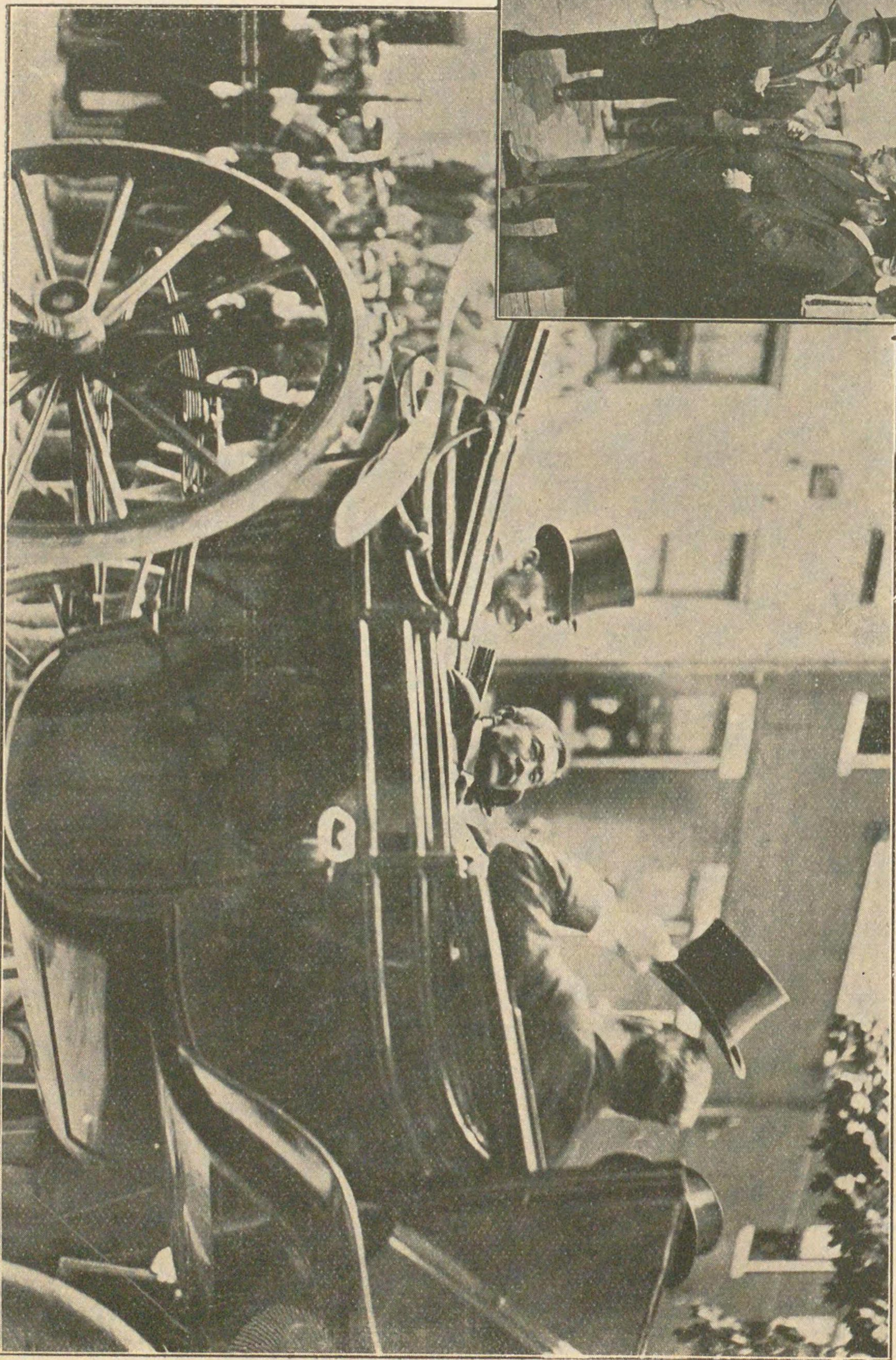


中將三好成行

シセーロ チツ井カ

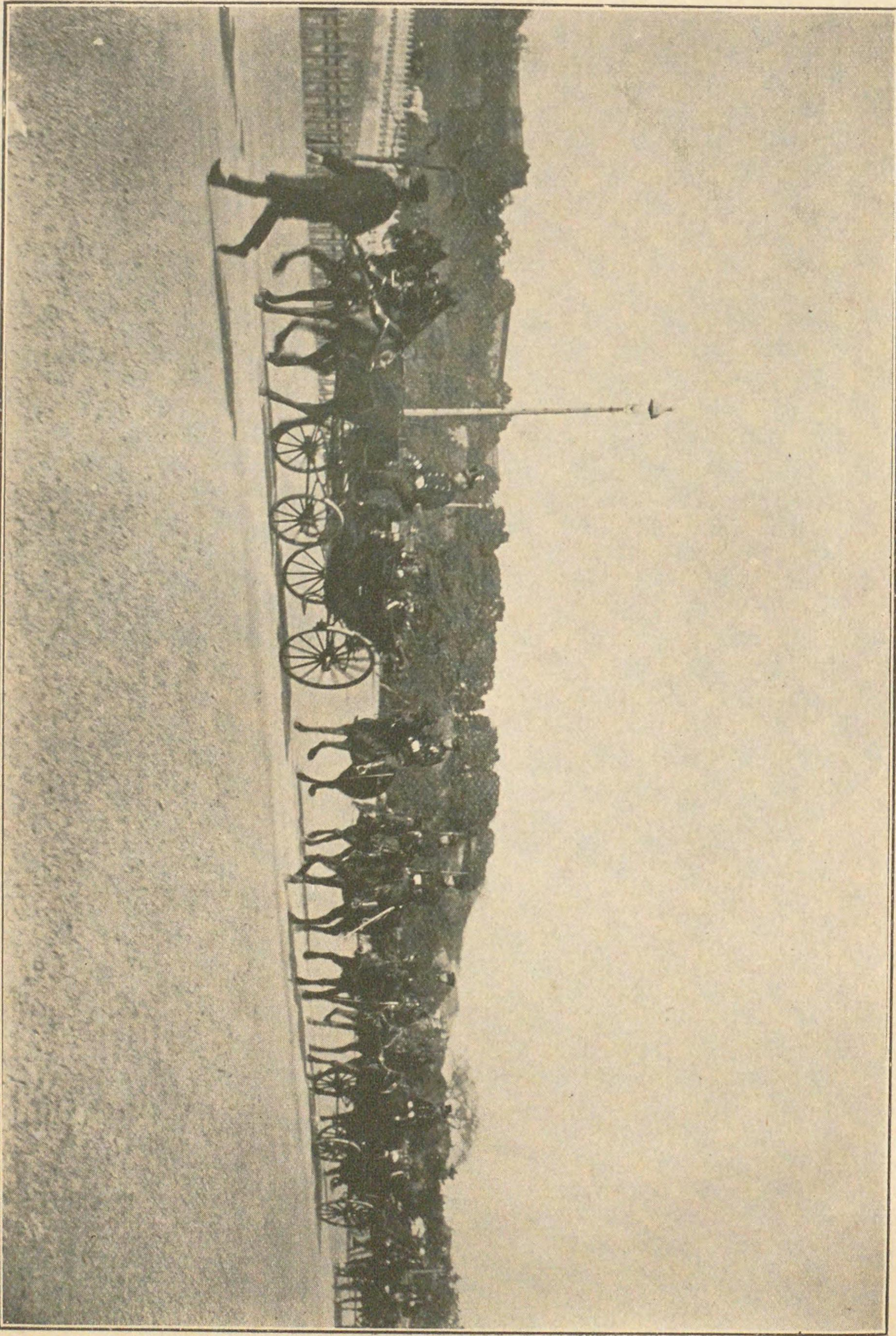


權全兩の露日



使大權全村小 使公平高

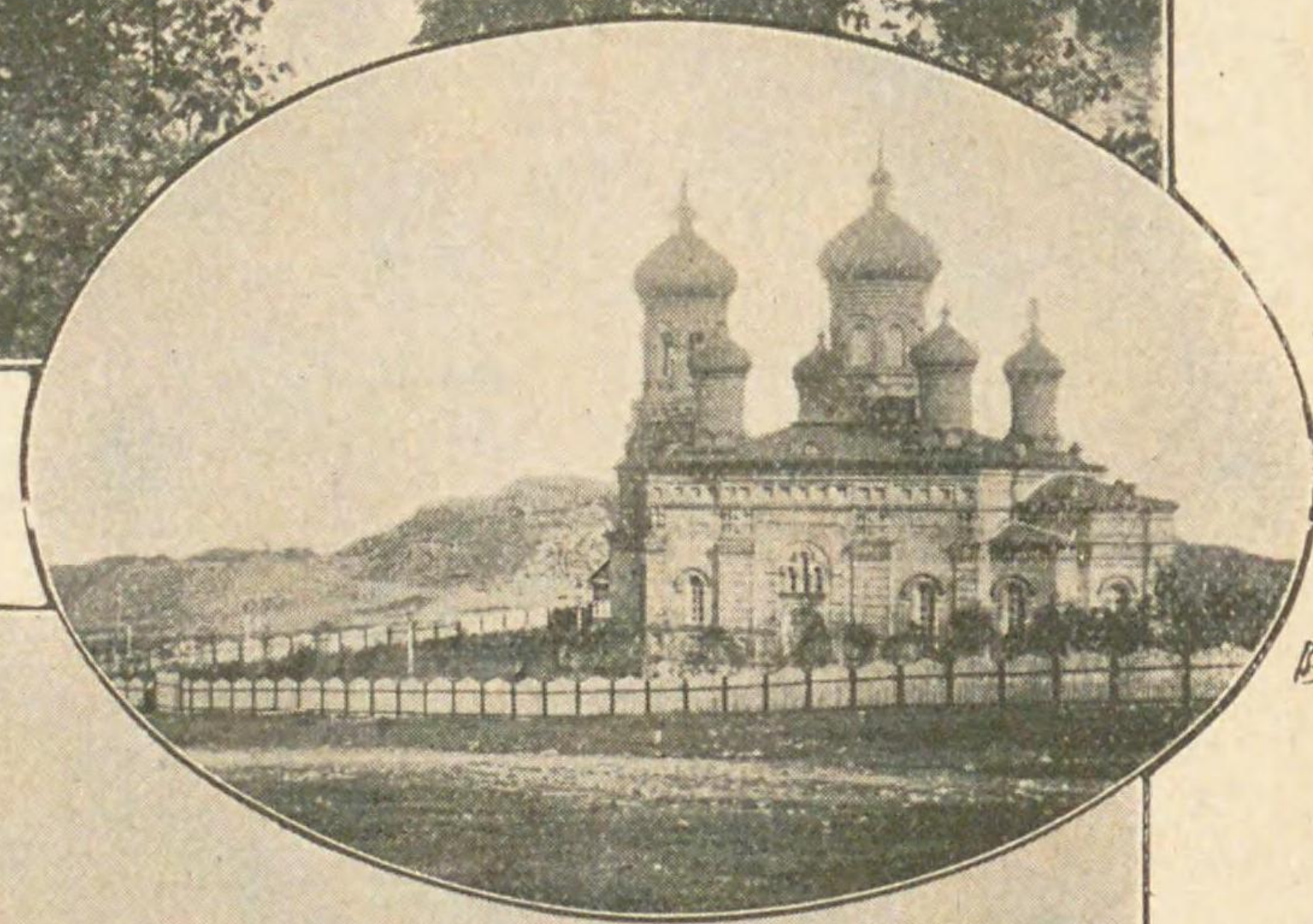
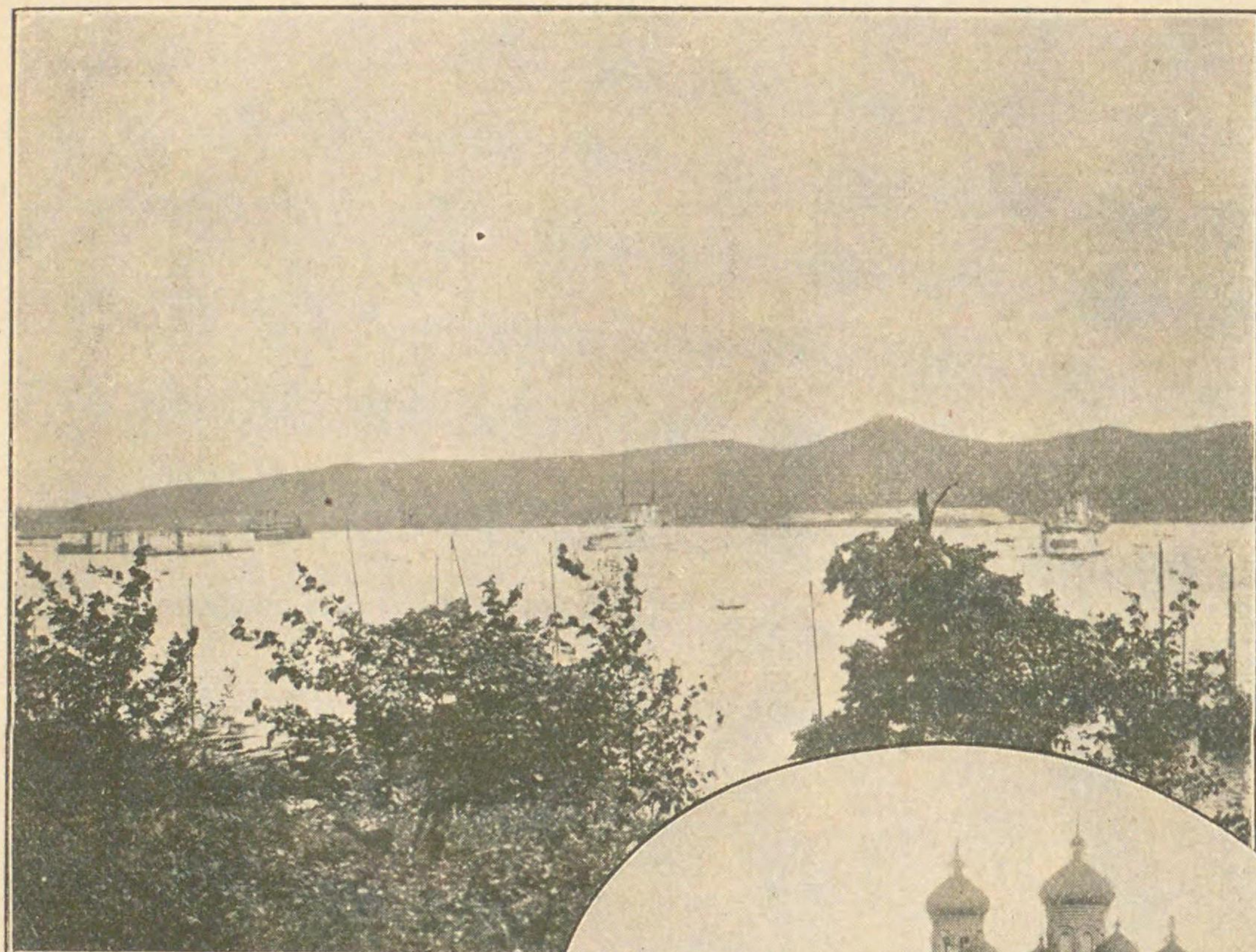
旋凱の軍二第



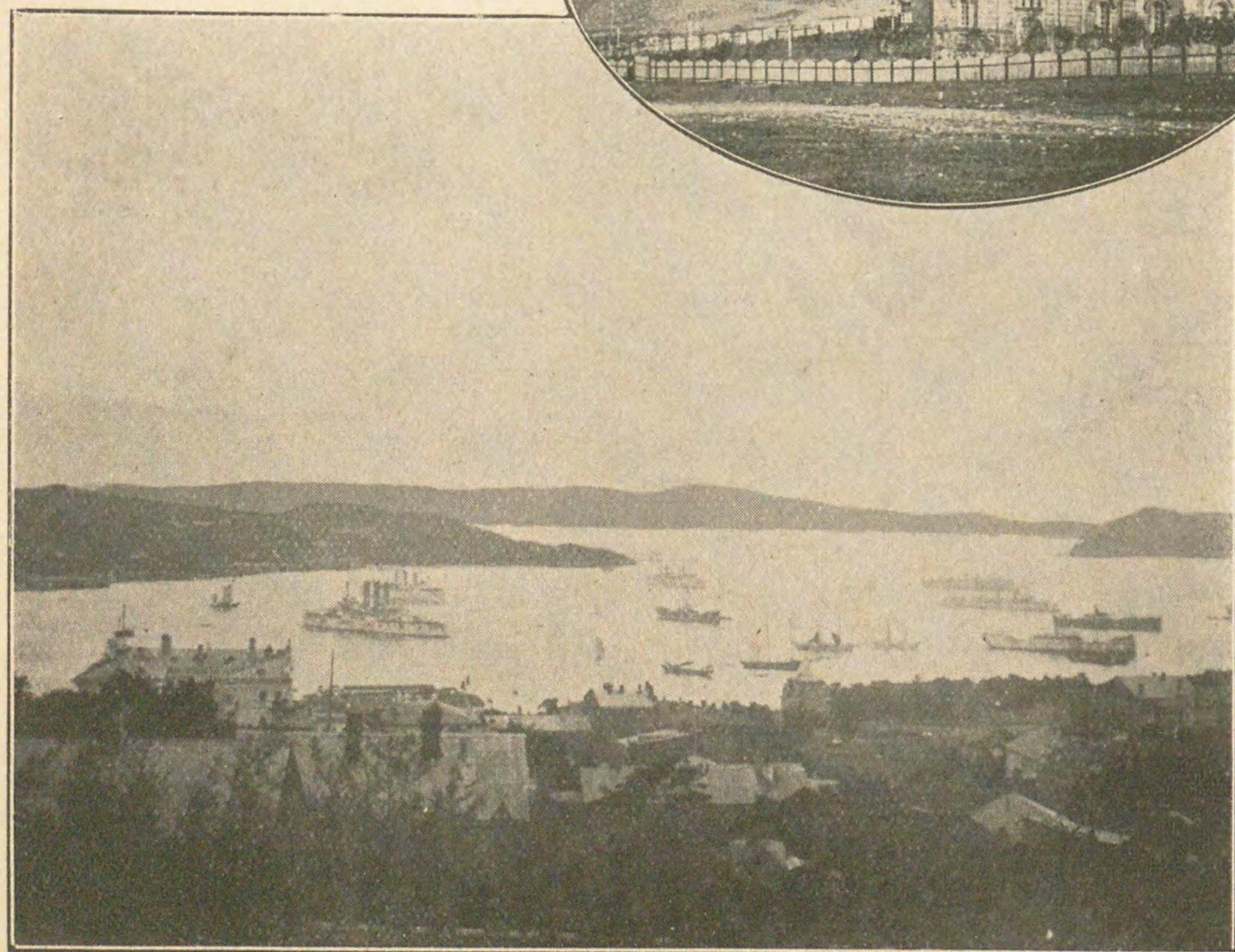
内參の官令司軍奧

浦 港 の 風 景

金角港の東端



イリナヤ寺院



金角港の入口

ウ
ラ
ジ
オ
ス
ト
ツ
ク

沿
海
州
の
偵
察

少年日露戦争史

第十六編

凱旋の巻

第一章

沿海州の偵察

巖谷小波編

樺太は已に我が手に入りました。否、實は我手に取り復へして、三十年來の恨を晴らしたのであります。次に進んで取るべきは、勢ひウラジオストツクでなければ成りません。

ウラジオストツクは、沿海州の東の端にある、露國には

北遣艦隊
豆満江
造山灣
雄基灣

沿海州の偵察

大切の港でありますから、敵の防備の堅固さは、決して旅順にも劣らない位。而も彼の東洋艦隊の一部は、猶此處に立て籠つて、我軍の來襲に備へて居りますから、勇敢なるわが軍も、亦輕卒には攻め掛れないのです。

其處で片岡中將の北遣艦隊は、樺太攻撃の効を奏してから、やがて方面を廻らして、七月十七日の未明には、豆満江の南の方、造山灣の前面に達しました。

此處はウラジオストツクに近く、豆満江第一の要地です。から、千早及び其他の驅逐艦は、逸早くも灣内に入つて、シスロ角、浦項附近を偵察しましたが、敵は案外氣樂で、哨兵も監視兵も置かず、只其邊に見えるのは、五六艘の漁船斗りですから、機敏なる驅逐隊は、更に進んで雄基灣ま

千早艦
監視兵と
小衝突

で入り、陸岸近く迫りました。

すると、彼方の小高い山の上に、敵の歩騎兵二百餘り居て、これを見ると直ちに銃口を向け、激しく射撃を試みましたが、味方は少しも恐れず、やがて砲彈を之に酬ひて、難無く追拂つてしまひました。

此間に千早艦は、羅津浦の西端ゲカ角に向つて、其北方の高地にある、敵の通信哨や監視兵に、猛烈な砲撃を加へて、全く其建物を破壊し、次で其邊を偵察する爲め、上陸隊が進んで行きましたが、別に敵の抵抗も受けず、やがて無事に引揚げて來て、報告するのを聞きますと、此處からウラジオストツク迄は、砲車が自在に通れる様に、立派な新らしい道路が出来て居り、また豆満江附近には、歩騎砲

山田司令官

オレコー
バ角
イヅム
岩ドの欄

北韓軍の活動

沿海州の偵察

機關砲兵等、併せて約二萬餘り、それに大小の砲が、七十

門斗りあると云ふ事です。此間に又、山田司令官(彦八)の率ひた一隊は、遠く沿海州の沿岸に向つて、委しく偵察を遂げましたが、其時聖ウラジミル灣の入口、オレコーバ角と云ふ處に、敵の巡洋艦イヅムロードが、帆檣は總て折れ、舵は全く碎かれ、無残な有様に成つて、岸に乘揚げて居るのを見付けました。此の猛射に耐えず、彼の五月廿七日の、日本海海戦中、我軍此の灣口へ来て、遂に最期を遂げたのであります。其後

第二章 北韓軍の活動

三好中將

六月廿日

鏡城

斯く海軍の北遣艦隊が、沿海州の偵察に従事して居る間に、陸軍はまた別に北韓軍を組織して、陸路をウラジオス

トツク方面へと向ひました。この北韓軍は、後備第二師團長、中將三好成行の率る處で、滿洲軍とは全く別途を取り、韓國の北部から、近く豆滿江を渡り、ポシエツト灣を踏越えて、直ちにウラジオス

トツクを衝かうと云ふのですから、彼の旅順の攻撃軍と共に、その任は至つて重大なものであります。で、此部隊の動き初めたのは、六月二十日の事でしたが、まづ鏡城の敵を撃退して、之を占領してしまひますと、其處に居た數千の敵兵は、鏡城から北四里斗りの、輸城方面へと退却しました。

北韓軍の活動

一體此の鏡城と云ふのは、北韓では随分大切な處でありますから、敵も早くから目をつけて、開戦の初から、幾度と無く此處へ来て、其近傍を掠かしますのに、元より腰の弱い韓人共は、その威勢に恐れて、時には露國の爲めに、種々な便宜を謀りましたので、我軍の行動は、其代り大分妨げられたのです。

然るに今我が軍が、全く之を占領してしまひましたから、是からの行動は、また必しも難くはありません。

で、此處から先はと云ひますと、豆滿江下流の地まで、行程二十里斗りあつて、其邊にはポセツト灣の要塞があり、嚴重に固めて居りますから、兼て期した大快戦は、勢ひ此邊に始まる筈と、何れも楽しんで居たのであります。

六

されば我軍は勇氣勃勃として、六月二十四日には、また輪城を占領しますと、敵は遁げながら二手に分れて、一方は會寧から富寧に入り、一方は海岸に沿うて、富店鎮へと向ひました。

我軍はまた敵を追うて、獐項附近まで進んで行きますと、やがて七月二日に成つて、敵は四百斗りの騎兵を以て、俄に前哨線に肉薄し、又六門の機關砲を發して、盛んに砲撃を始めました。

小癩な奴と我軍は、直ちに砲火を開いて之に應じ、見る見る中に敵兵を、蜘蛛の子の如く追ひ散らし、五十名餘りの死傷者を、戦場に残すに至らしめました。

尤も此時に、我軍は別に支隊を出して、敵の退路を遮ら



ポース
ウスの
マ談判



虚通溝

北韓軍の活動

しめ、虚通溝附近に於て、此逃げ散る敵の騎兵に、更に打撃を加へたのは、實に小氣味の好い事でした。然るに越えて四日の夕方、敵騎二千餘りが、襲撃に來ると云ふ報知がありましたので、我が前哨の將校斤候は、進んでその偵察を試みましたのに、敵の三十騎斗りに出會ひましたから、忽ち一齊射撃を食はし、これをも撃退してしまつたのであります。かく北韓軍の行動は、着々と歩を進めて、全軍の意氣ますます熾んに、はや沿海州をも呑む斗りでありましたが、茲に思ひ掛けない障害が起りました。

洪水中の滞陣

第三章 洪水中の滞陣

富寧

霖雨

一體北韓から滿洲へかけては、氣候がまことに宜しからず、屢々雨が降りつゞきますが、その霖雨の時に成ると、川は溢れ、山は崩れ、交通は忽ち絶えて、その困難は一通でありません。されば我が北韓軍は、先に鏡城、輸城を陥れ、更に破竹の勢を以て、七月二十二日には、富寧府をも乗取りました。恰も此頃から、例の霖雨は降り始めまして、やがて二十五日頃には、一層の暴雨と變じ、盆を覆へし、車軸を流すと云ふ、凄じい勢になり、見る／＼中に溪流は溢れて、四邊は洪水の有様となりました。かう成ると、今まで無事に通れて居た、輸城と富寧との間の橋は、濁流の爲めに流されてしまひ、果は獐項附近に

會水會

一隊兩岸に別る

洪水中の滞陣

在つた、兵站部の天幕も洪水に襲はれ、其處にあつた糧秣から、患者療養所に至るまで、見るく濁水に流されて、無慘にも患者一名は、行方知れずになりました。けれども暴雨はまだ歇まらず、今度は富寧と虚通溝との間の、會水會の架橋をも、翌二十六日の朝、用捨無く押し流してしまひましたから、憐むべし北韓軍は、降雨と洪水との兩敵の間に、全く孤立の有様となり、進退の路は云ふまでも無く、糧食を得る術をさへ、殆んど途絶へてしまつたのであります。

中にも第二歩兵彈藥縱列は、恰も行進中でありましたので、百五十餘名は北岸に、五十餘名は南岸にと、全く兩斷されまして、如何する事も出来ません。けれども屈せぬ縱

溪水汎濫

風の奇計

列長は、自から率先して部下を勵まし、翌廿七日の、雨勢の少しく衰へたのを見て、まづ一條の麻繩を取り出し、これを前岸の味方に投げて、互ひに連絡を取らうとしますのに、何分水は溢れに溢れて、川幅が大層廣く成つて居ますので、思ふ様に繩が届きません。

すると、兵の中に機轉の利いた男が居まして、『これには風を拵へて、繩を彼方へ届かせたらよいでせう。』と云ひますので、『これは全く妙案だ』と、直ちに風を張らせ、これに繩をつけて揚げましたら、幸ひ南風が強かつたので、難無く風は北岸に達し、繩も同時に届きましたから、之に依つて兩隊は、初めて連絡を取る事が出来、何れも眉を開きまして、蘇生の感をしたと云ふ事です。

二十八日
初て開通

洪水中の滞陣

此時また、後方約二里にあつた、獐項の兵站部では、人夫數百名を備ひ上げて、米三斗乃至五斗を擔がせ、わざわざ山路七八里を廻はつて、此處へ糧食を運んで來た處です。から、我隊は即ち滑車を用ひ、吠一俵に人夫一人宛と、その滑軍で綱渡りをさせて、無事に輸送の目的を達したのは、此場合此兵團に取つて、實に非常な功績でありました。

されば翌二十八日には、一方ならぬ困難を経て、辛くも橋を架ける事が出來、それに依つて後方との連絡が、十分通じる様に成りましたので、今まで非常に欠乏して居た糧食も、是に於て運搬の道も開かれ、全軍幾萬の將卒が、漸く元氣を恢復するに至りました。

彼の文祿の朝鮮征伐には、加藤清正が蔚山に籠つて、非

會寧方面
の攻撃

昌斗嶺
五峯山

常な苦勞を甜めました。我が北韓軍の三好中將の、此の洪水中の滞陣は、全くそれにも劣らぬ程の、大困難に出會ひまして、而もこれに打勝つたのであります。

第四章 會寧方面の攻撃

銃火砲彈を以て戦ふならば、如何なる敵をも恐れぬのは、我軍の常であります。この大雨と洪水との、天來の強敵の爲めには、少からず惱まされて、暫時は之が爲めに、作戦計畫をするよりは、橋梁の架設やら、道路の改修やらに、殆んど全力を注ぎました。

此時敵は如何にと云ふに、これはその主力を、昌斗峯から五峯山に亘る線に置き、一部を古豊山に留め、盛んに防

日英同盟
の祝宴

會寧方面の攻撃

第四章



丸井支隊
梅地支隊

會寧方面の攻撃
備工事を施して、今度は眞面目に渡り合ふと云ふ、健氣な
覺悟を見せて居りましたが、我軍は前にも云ふ通り、強雨
と洪水とに前進を妨げられ、漸く敵に向ふ様になつたのは、
八月中旬の事でありました。尤も其間には、後備歩兵第二
十五聯隊が、新たに増員を加へられて、士氣も大いに振つ
たのであります。

その進撃の方法は、丸井支隊の左翼を葛布峯に、梅地支
隊を石浦附近に、主力は直ちに會寧道にと、三方に別れて
前進し、更に本郷支隊をして、其左側を進ませました。
そこで八月三十日から、翌三十一日まで、まづ古豊山
の敵を撃つて、これを占領はしましたが、敵は猶昌斗峯の
險に據て、頑強に抵抗し、夜まで盛んに攻めましたが、遂

九月一日
内藤部隊
泉部隊

再度の雨

に好果を見るに至りません。

されば九月一日の戦には、更に砲兵を正面に置き換へ、
猛烈なる射撃を浴びせながら、内藤部隊は其機に乗じて、
東側の山傳ひに、敵の左翼を攻撃し、少からぬ困難を経て、
其陣地に乘込みますと、これと同時に泉部隊も、西側の山
を攀ちて、遂に五峯山の鞍部を占めましたから、流石の敵
も今は耐へきれず、遂に昌斗峯の陣地を捨て、細石峯か
ら會寧の方面へと、急いで退却したのであります。

勝に乗つた我軍は、透かさず會寧川を渡つて、敵を追撃
しました。が、此時又も雨が降つて、大いに行進を妨げまし
たので、十分敵に迫る事は出来ず、余議無く二三日滞陣し
て、雨の晴れるのを待ちました。

天氣恢復

休戰命令

會寧方面の攻撃

で、暫時機を見て居ります中に、天氣も恢復しましたか
ら、いよく來九日を以て、會寧攻撃を實行しやうと、上
は司令官、旅團長から、下は下士、兵卒に至るまで、何れ
も腕を鳴らして居りますと、思ひ掛けずもその二日前、即
ち七日の夕方を以て、『休戰！』と云ふ命令は、大本營から
電報で來ました。

休戰とは、戰鬪を中止する事でありませぬ。

道路の險悪を冒し、天候の不順を忍び、幾多の苦痛と艱難
とを経て、漸く此處まで進んで來た、我が勇敢なる北韓軍
が、今眼前に敵を控へながら、急に戰鬪を中止するには、
さながら抜きかけた刀をば、再び鞘に納める様なものでは、
然らばその刀は、何故納めねば成りませぬでしたか？

平和風

平和風の
由來

米國大統
領ルーズ
ベルト

それは他でもありません。此時恰も平和の風は、遙か西
半球の一端から起つて、この東洋に吹き渡つた故でありま
す。

第五章 平和風の由來

さてその平和風なるものが、何時何うして起つたかと
云ひますに、是より先、我が勇敢なる日本軍が、彼の遼陽
を攻撃して、遂にこれを占領した時の事です。ルーズベル
トと云ふ亞米利加の大統領は、私かに手を廻はして、露國
に和睦を勧めて見ました。これは此儘すて、置けば、露國
はいよく敗ける斗り、徒らに兵を損じ、國を亂してし
まふのを、氣の毒に思つた故であります。

二度目の忠告

平和風の由来
 然るに頑冥なる露國の大臣等は、折角の大統領の忠告を
 斥け、猶も戦争を續けます中に、頼み切つた旅順は落され、
 奉天の陣地も奪はれましたから、それ見た事かと大統領は、
 又もや媾和を勧めたのですが、その時はまた露國の方でも
 彼のバルチック艦隊を繰り出して、東洋の海軍力を、再び
 持ち直さうと云ふ時でしたから、未だ諦めが付かないで、
 この二度目の忠告をも、好い加減に斷つてしまひました。
 處がそのバルチック艦隊も、遙々東洋まで進んで來なが
 ら、東郷艦隊の鋭鋒の前には、虎に會つた羊の如く、僅か
 一日半の戦で、散々に撃破られてしまひましたから、此上
 は誰が見ても、もはや露國の力では、所詮日本に勝てない
 と云ふ事が、旭を見るより明に成つたのです。

平和風の由来

高平公使

カシニイ大使

平和に熱心なる米國の大統領、何で此機を免がしませう。
 又も調停を試みる心算で、今度は日本の内意を聞きに來ま
 したから、日本は高平公使(小五郎)を以て、斯う云ふ答をさ
 せました。

『成る程日本とても、決して戦争を好むのでは無い。名
 譽ある媾和を結ぶ事は、元より望む處である。然し、露
 國に媾和の意の無い間は、我は飽くまでも戦争を續けて、
 決して調停を頼む事はせぬ』

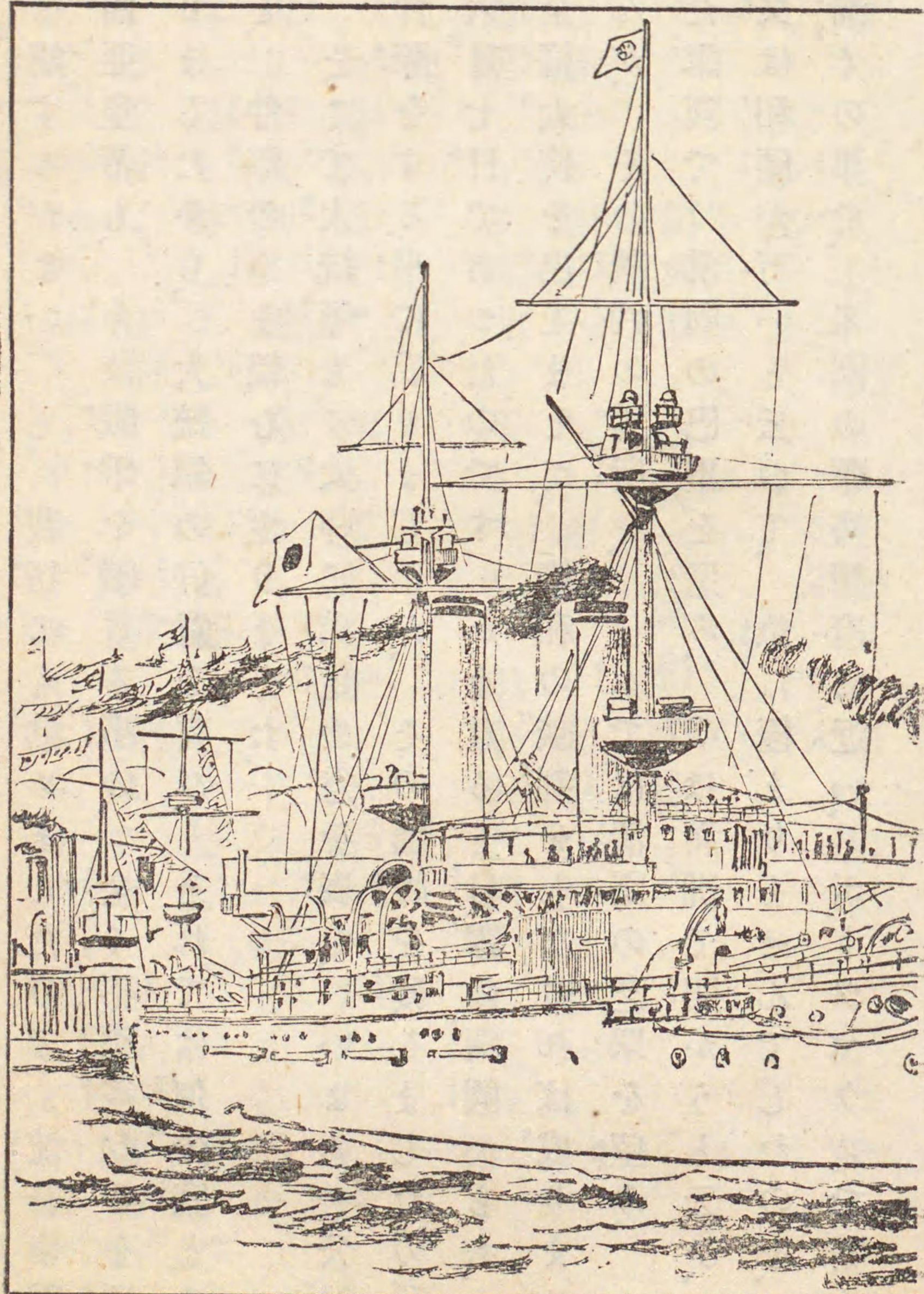
と、立派に挨拶をしたのであります。

するとまた大統領は、更に露國のカシニイと云ふ大使に、
 『露國の地位の危いのを説き、海陸共に斯く大敗を取つた
 上は、よろしく自國の爲め、世界の爲め、一日もはやく和

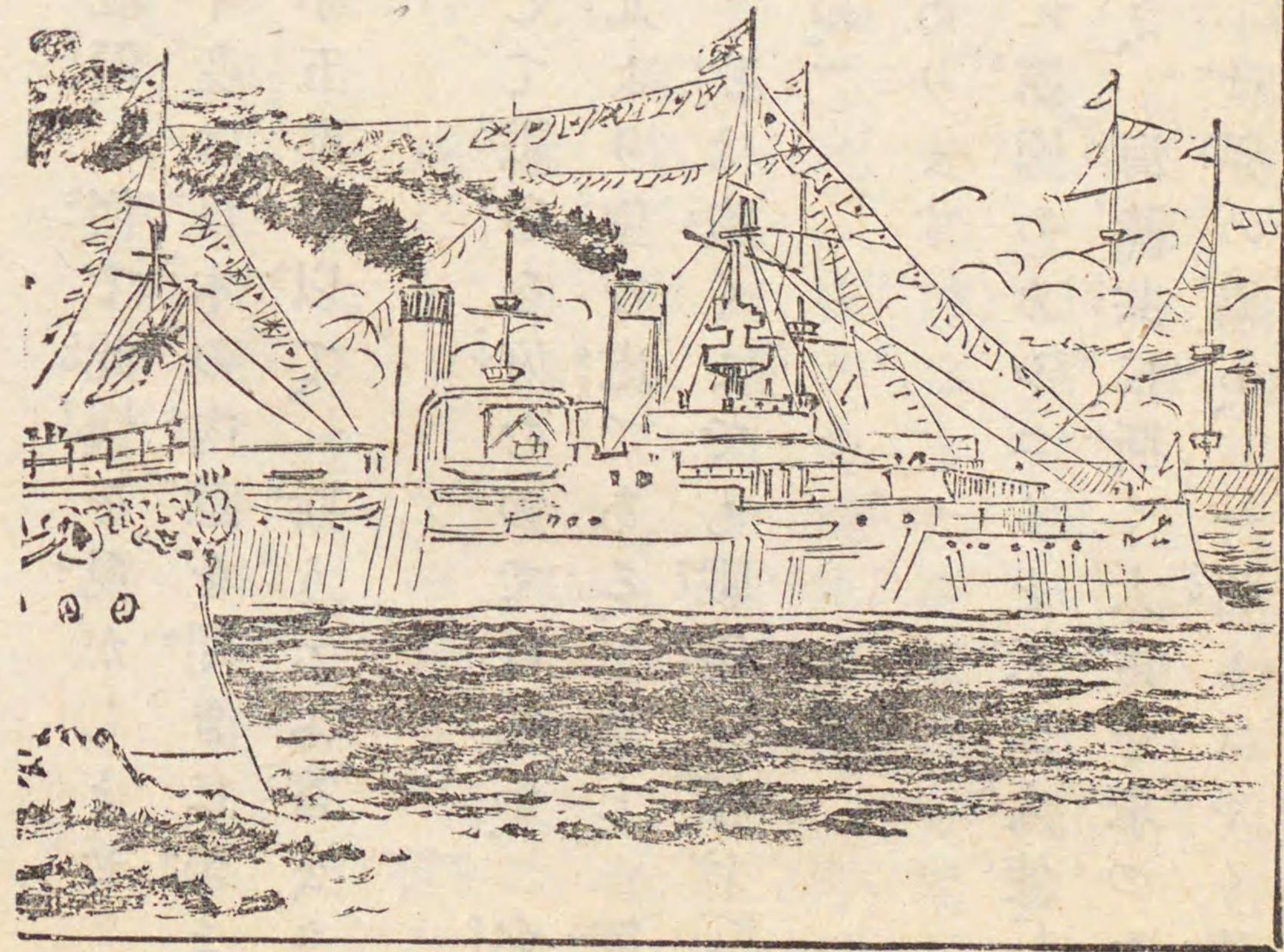
大觀艦式

平和風の由來

第五章



二五



二四

ポーツ
ウス
ロ

六月七日

平和風の由来

二六

を構ずるがよい』と。親切にも勧めましたので、流石の露西亜皇帝も、今は戦争を続ける事の、全く不利益なのを悟りましたから、大統領の好意を喜び、それでは何分宜しくと、仲際の事を頼むに至りました。

そこで大統領も、大いに満足の意を表し、いよいよ公然仲際をする事になりましたが、その通牒を發しましたのが、六月七日であつたのです。かうなると日露の兩國からも、全權大使を出しまして、媾和の談判をしなければ成りませんが、その談判の場所を、日本では清國の芝罘を望み、また露國では佛國の巴里を選び、或は滿洲で開かうと云ひ、又は和蘭が可いと云つて、急に極まりませんでしたのを、漸くの事で、米國の華盛頓府に近い、ポーツマウスで開く

兩國の媾
和委員

子リドフ
ムラビオ
テ大使全權
キツ

事にしました。尤も談判地を米國に選んだのは、實は日本から云ひ出したのです。

第六章 兩國の媾和委員

媾和の事がいよいよ定まり、場處も已に選ばれますと、同時にこの談判に與るべき、兩國の全權委員が任命されました。

此時露國では、初め巴里に居る公使の子リドフを任じ、次に伊太利に居る公使のムラビエーフに命じましたが、何れも之を辭しましたので、遂にこの大任は、前に大藏大臣をして居た、伯爵井ツテの肩に負はされ、又之が隨員として、マルテンス、ポコチロフ、エルマロフなどが任せら

日本全權
大使小村
外務大臣

勅語

兩國の講和委員

れました。中にもマルテンスは、世界でも名高い國際公法の學者で、斯う云ふ談判の場合には、是非居なければ成らない人なのです。

さて日本の全權委員はと云ひますと、時の外務大臣をして居た、男爵小村壽太郎を初め、全權公使高平小五郎、辨理公使佐藤愛鷹、政務局長山座圓次郎、書記官安達峰一郎、同落合源太郎、同本多熊太郎、外交官補小西孝太郎などが、この大役に當る事になりましたが、中にも小村全權大使は、七月二日を以て、宮中に召され、正式の御委任状と共に、懇篤なる勅語を賜はりました。

米國大統領ハ、日露兩國ノ交戰、年ヲ累子テ未ダ解ケザルヲ憂ヘ、人道及平和ノ爲メニ、争ヲ輟ムルノ急ナ

七月八日
出發

ルヲ思ヒ、兩國政府ニ對シテ互ヒニ全權ヲ簡派シ、會同商議セシメンコトヲ勸告シタリ。
朕ノ常ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ、戰フノ止ムヲ得ザルニ至リタルハ、固ヨリ朕ガ素志ニアラズ。苟モ對手ノ融悟ニヨリ、干戈ヲ戢ムルヲ得バ、何ノ慶カ焉ニ若カン。
朕速ニ大統領ノ忠言ヲ容レ、郷等ニ命ジテ和議ヲ訂結スルノ任ニ膺ラシム。郷等其レ専心從事、平和ヲ永遠ニ恢復スルノ目的ヲ達センコトヲ努メヨ。
と、これが勅語の全文であります。
されば小村大使は、この御趣意を謹んで承り、次で七月八日横濱を發し、その二十五日には米國に着て、紐育の高

海軍鎮守府の將校集會所

兩國の媾和委員
平公使に出會ひ、萬事の打合せをしましたが、露國の大使
井ツテの一行は、少しくこれに後れて、七月末に佛國から
乗船し、同じく紐育に着きましたのは、八月四日の事であ
りました。

紐育からホーツマウスへは、二百七十一哩もあるのです
が、その代り此處は太西洋に面して、風景も佳ければ、氣
候も好く、夏期は避暑の客が賑ふので、随つてホテルなど
も、常から立派な物が建つて居ります。
然し兩國の全權が、大切な媾和の談判をしますのは、わ
ざと普通の人の近づけない、海軍鎮守府内の、將校集會所
の樓上と定められました。
此時大統領ルーズベルトは、この兩國の仲際と云ふ、重

船中に饗應

八月十日

我媾和條件

大な役目を引受けて居るのですから、豫め其近處まで出張
つて居て、兩全權員の到着を待ち、やがて八月五日を以て、
此の人々を自分の船に招待し、盛んな午餐を開いて、双方
を紹介しましたが、その時自分は杯を舉げて、日露兩國の
の爲めに、永久の平和を望み、尙双方の國民の、ますく
繁榮する様にと、熱心な挨拶を陳べて、兩國全權員等の健
康を祝しました。
これで對面が濟みますと、次いで媾和談判の幕は開かれ
ました。その最初の會見は、實に八月十日であつたのです。

第七章 我媾和條件

さて八月十日、日露の兩全權は、例の談判場に臨みまし

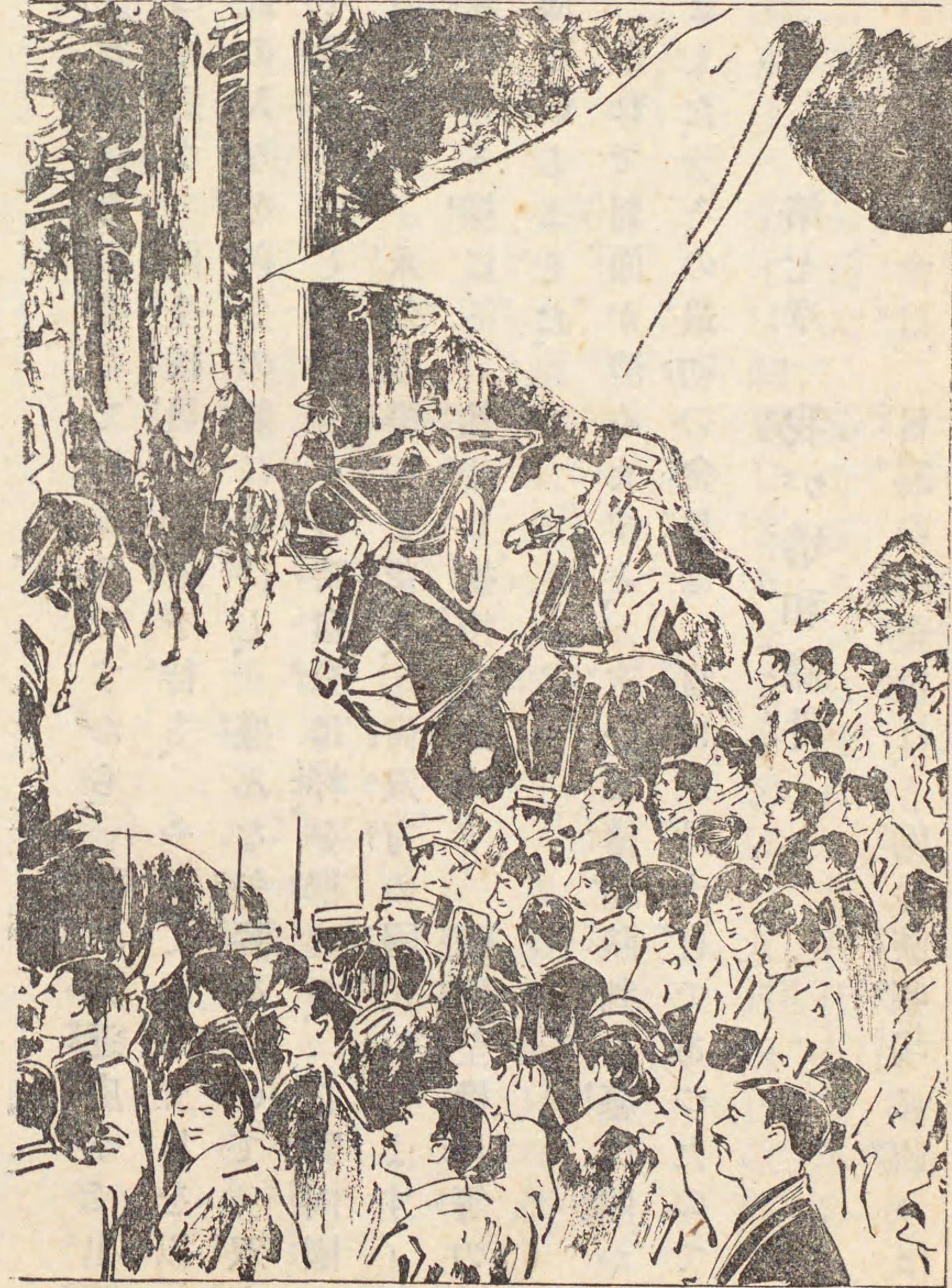
伊勢行幸

第 七 章



三三

我が婿和條件



三三

十二條

我が媾和條件

て正式に談判に掛りましたが、その時我全權からは、まづ媾和の條件を提出しました。是は日本が勝つた國として、正當に持つて居る義理なのであります。

今その條件を見ますに、

第一 朝鮮を日本國の保護權内に置く事。

第二 滿洲に居る日露兩國の軍隊は、同時に撤去してしまふ事。

第三 滿洲の統治權は、清國に還へしてしまふ事。

第四 滿洲の商業及政治の權力は、皆清國の手に任かしてしまふ事。

第五 樺太を日本へ渡す事。

第六 日本は露國に代て、遼東半島を清國から借りる事。

第七 東清鐵道を日本に讓渡す事。

第八 露國は西伯利亞鐵道聯絡の特權を持つて居るが、今後はウラジオストツクへ通ずる鐵道を、清國の保護に

委かす事。

第九 軍費を賠償する事。

第十 中立港で武装を解いた軍艦は、皆日本へ引渡す事。

第十一 露國の太平洋艦隊に制限を加へる事。

第十二 沿海州の漁業權を日本に讓る事。

午前五時より會見

と、この十二條で、是から兩國の委員は、毎日午前の九時から會見して、この條件を順々に相談する事になりました。

然るに露國の全權井ツテは、此中償金の支拂と、樺太の

絶露國の謝

我が媾和條件

三六

割譲とを、先以て堅く斷つて來ましたが、尙他に大切な事
 がありまますから、我全權は兎も角も、豫定の審議を遂げる
 事にしました。

で、十二日の會議には、第一條の朝鮮問題に付て、朝か
 ら夕方まで議論しましたが、容易に決定しませんで、次の
 十三日は、日曜にも拘らず、午後三時から又會議を開き、
 漸く十四日に成つて、初めて日本の要求通りに極まり、次
 いで第二の撤兵の事、滿洲返還の事も纏まりました。

けれども露國は、如何なる名議を以ても、償金は一文も
 出さぬ、また樺太の地は、一寸も譲らぬと云ひ張ります。
 勢ひ斯うなると、我邦の要求條件から、此の二ヶ條を取り
 消さなければ、談判の纏まり様がありません。

媾和の難關

談判が纏まらないと成れば、續いて戰爭を仕なければ成
 りません。が、この戰爭を續けると云ふ事は、日露兩國に
 取つて、果して利益でありませうか？ 此所は頗る考物で
 あります。

されば大統領ルーズベルトは、常から平和を好む人だけ
 に、この談判の行惱みを、大いに氣遣ひまして、双方の間
 を種々に説き宥め、辛くも會議を續けさせました。

第八章 媾和の難關

實に償金と樺太割譲とは、今度の媾和談判に取て、頗る
 困難な關所であります。

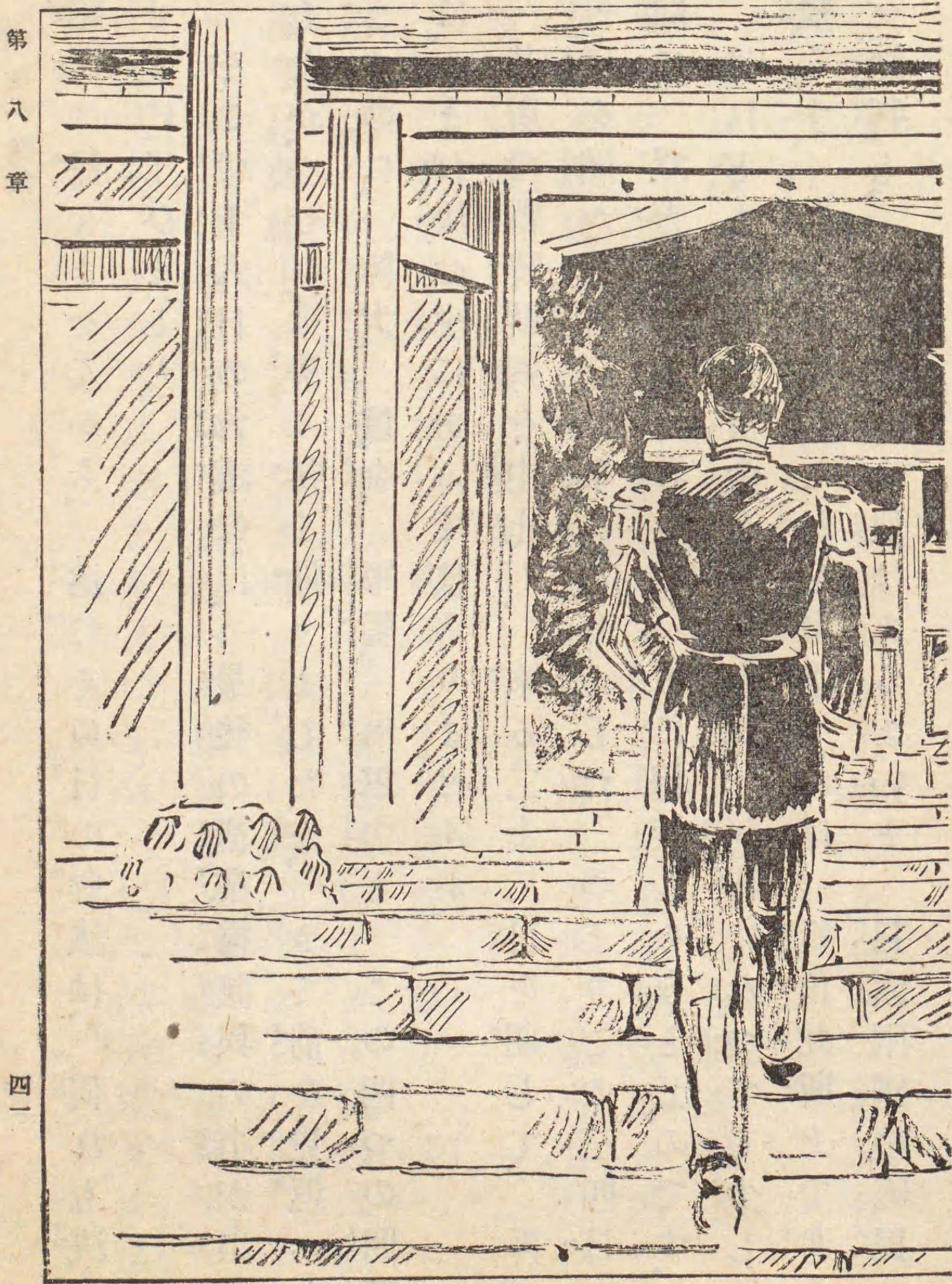
で、十五日の會見には、清國の滿洲統治權の事や、遼東

露國の苦痛

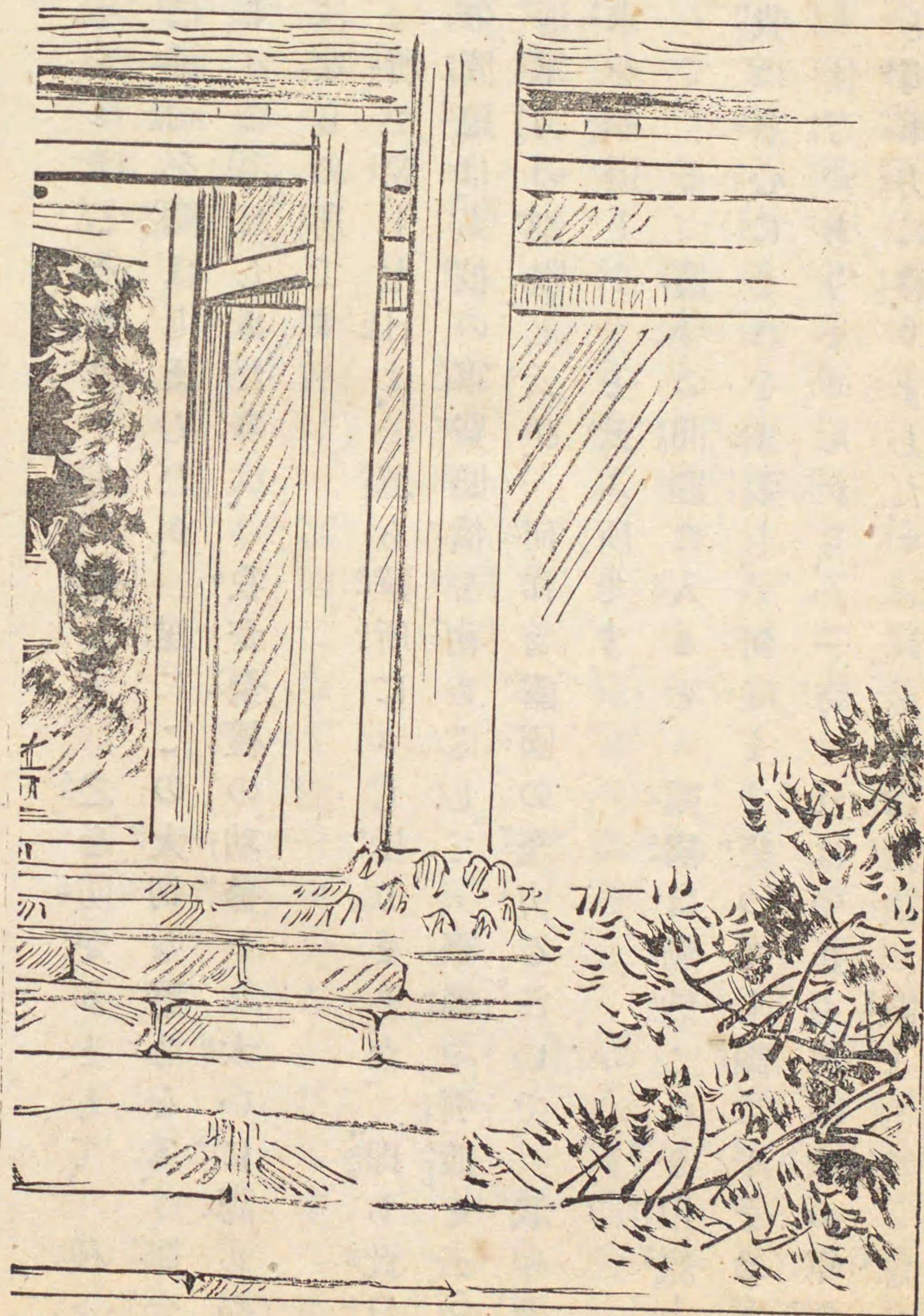
三六
 半島讓與の事と共に、樺太問題も出ましたが、何分この難
 關は、露國の必死に防く所です。容易に踏越える事が
 出來ず、餘議無く後日に延ばしまして、滿洲と遼東半島の
 事だけを、我が要求通り取り極めたのです。
 次の十六日の會議は、第七條東清鐵道と、第八條浦鹽線
 の事でしたが、これは午後七時まで掛つて、互ひに議論を
 闘はした揚句、遂に我が要求の如く、露國は承諾させられ
 ました。
 蓋しこの二條件は、露國に取て随分せつない話です。幾
 多の歲月と、幾萬の資本とを費して、漸く成功させた大事
 業を、むざ／＼水の泡にして、この東方亞細亞に於ける、
 年來の大野心をも、共に棄てなければ成りません。

談判中止

三九
 さればこそ井ツテも、何して、之を防がうとして、種々
 に議論を闘はしましたが、遂にこの大切な野心をも、斷念
 するに至らしめたのは、我が全權の功勞を、大いに認めぬ
 ばならぬ所です。
 所が翌十七日は、忽ち難所にさし掛りました。即ち此日
 の問題は、彼の軍費賠償を初めとして、軍艦の引渡と云ひ、
 海軍力の制限と云ひ、何れも露國の全力を注いで、我が要
 求を撃退しやうと云ふ所です。
 で、まづ償金の問題に入ると、露國は斷然これを拒絶し、
 我は熱心にこれを主張し、何時まで経つても論は干ません。
 仕方がありませんから、一時これは中止して、次の軍艦
 と海軍力に移りました。けれども尙議論が喧ましく、急に



東郷大將
の
大廟
拜



又中止

講和の難關

結局は見えませんが、遂にその日の會議は、何れも決定せず、了ひました。

そこで十八日の會議には、最後の漁業權讓與の事が出ましたが、これは滞り無く通りましたが、さて前を見返へしますのに、樺太、償金、軍艦、海軍力と、この四つの問題は、また決せずにあるではありませんか。

其所で暫時談判を中止し、来る二十二日を期して、再び會議を開かうと云ふ事になりました。つまりこの三四日の間に、双方ともよく考へて、更に相談しやうと云のです。けれども露國が償金を嫌ふ事は、何時になつても少しも變らず、若し日本がこれを取消さねば、折角此所まで進んだ談判も、所詮破裂の他はあるまいと、日露兩國の國民は

大統領の調停

金子男爵

小村の強硬

云ふまでも無く、彼の仲際者の大統領を初め、世界各国の者までが、皆手に汗を握りました。

さればこの中止の間に、大統領は双方の全權を説き、猶其頃に、丁度米國に居合はせた、男爵金子堅太郎を通じて、我が本國政府の内意を確めたり、専ら調停に盡力したのは、實に一通りの好意ではありません。

我が小村全權は、尙頑として自説を執り、少しも露國に譲る色を見せませんから、さてはいよく談判は破裂、戦争は繼續と、かう云ふ噂が段々に高まりましたが、よしや今談判は破れても、憐むべし露國には、直ちに戦争を續ける丈の、力があるまいとは、已に識者の見る所でした。

第八章

媾和の成立

媾和の難關

四四

これも其筈で、丁度其頃露國では、例の虚無黨が諸方で蜂起し、政府に向つて示威運動をいたしましたから、露國は外國と戦ふより、まづ此等の内亂を、先に取鎮めねば成らぬと云ふ、苦しい場合に成つて居たのです。

それにしても此談判は、遂に破裂したてでありませうか？

第九章 媾和の成立

約束の二十二日は來ました。然るに會議は、突然また二十三日に延ばされたのです。で、二十三日の午前九時半から、第九回の會議が開かれましたが、此日も決定するに至らず、又々二十六日を以て、談判を續ける事になりました。

露帝の拒絶

樺太半部割讓

その間大統領は、露國公使のローゼンを通じて、直接露帝にも忠告をしましたが、其時露帝は、滿洲軍の新司令官、リ子井ツチの報告に依つて、戦争繼續の見込あるのを信じ、却つて大統領の忠告を拒み、償金、割讓を忍んでまでも、平和を望ましくないと答へたさうです。

そこで大統領は、遂に双方の意見を折衷して、二十六日の會議には、樺太の半部を割讓し、他の半部に對しては、露國が日本から買戻した事にして、相當の金額を仕拂ふと云ふ、新條件を出しましたが、これをも頑固な露國は、少しも取合ふ氣色がありません。そこでまた會議を延ばして、次の會見を二十八日の午後としました。

延期に延

御前會議

此日井ッテは、露帝の内意だと云ふのを、我が全權に洩
 しました。露國は樺太の半分を割き、
 又俘虜に對しては、金額を仕拂ふ事を辭せぬけれど、それ
 より以上の事ならば、決してこれに應じないと云ふ事です。
 然るに二十八日の會見は、また延びて二十九日に成りま
 したが、その二十八日には、我が本國の内閣員を初め、伊
 藤、山縣、井上の三元老、伊東軍令部長も列席して、重要
 な御前會議を開きました。御前會議とは、大元帥陛下の御
 前で、大切な事を評議する事です。
 所がその御前會議の結果で、我が寛仁なる日本國は、世
 界の文明の爲め、又利益の爲めに、堪忍の出來ぬ堪忍をし
 て、償金の要求を撤回し、樺太の半分を取りさへすれば、

講和の成立

四六

局面一變

一億五千
萬圓

軍艦の引渡も、海軍力の制限も、共にそれには及ばぬ事に
 しました。
 我が日本にして、已にかくまで讓歩した以上、何で談判
 が破裂しませう。
 一旦はハタと行詰まり、此上は我が全權の一行も、斷然
 袂を拂つて歸らうとまで、已に覺悟を極めて居たのが、忽
 ち局面は一變し、談判も遂に無事に結了して、茲に講和は
 成立しました。
 その講和の條件は、先に掲げた十二條の中から、償金、
 軍艦、海軍力の三條を除き、また樺太割讓の事は、北緯五
 十度以南と改まり、別に俘虜給養の費用として、露國は我
 國に、一億五千萬圓を支拂ふ事に成つたのです。

第九章

四七

記名調印

九月五日

國民の激昂

媾和の成立

かく媾和が極まりますと、直ちに休戦の約束を結び、露國も日本も、共に滿洲の各隊に、急いでこの次第を達しました。

彼の北韓軍の勇兵が、今にも會寧を衝かうとして、而も俄に見合はせたのも、全く此爲めなのであります。

かくして双方の全權委員は、この取極まつた媾和條件に付いて、更に議定書を作り、之に記名し、調印しましたのは、九月五日の事でありましたが、恰もその當日、遙か本國の首都に於ては、意外の珍事が起りました。

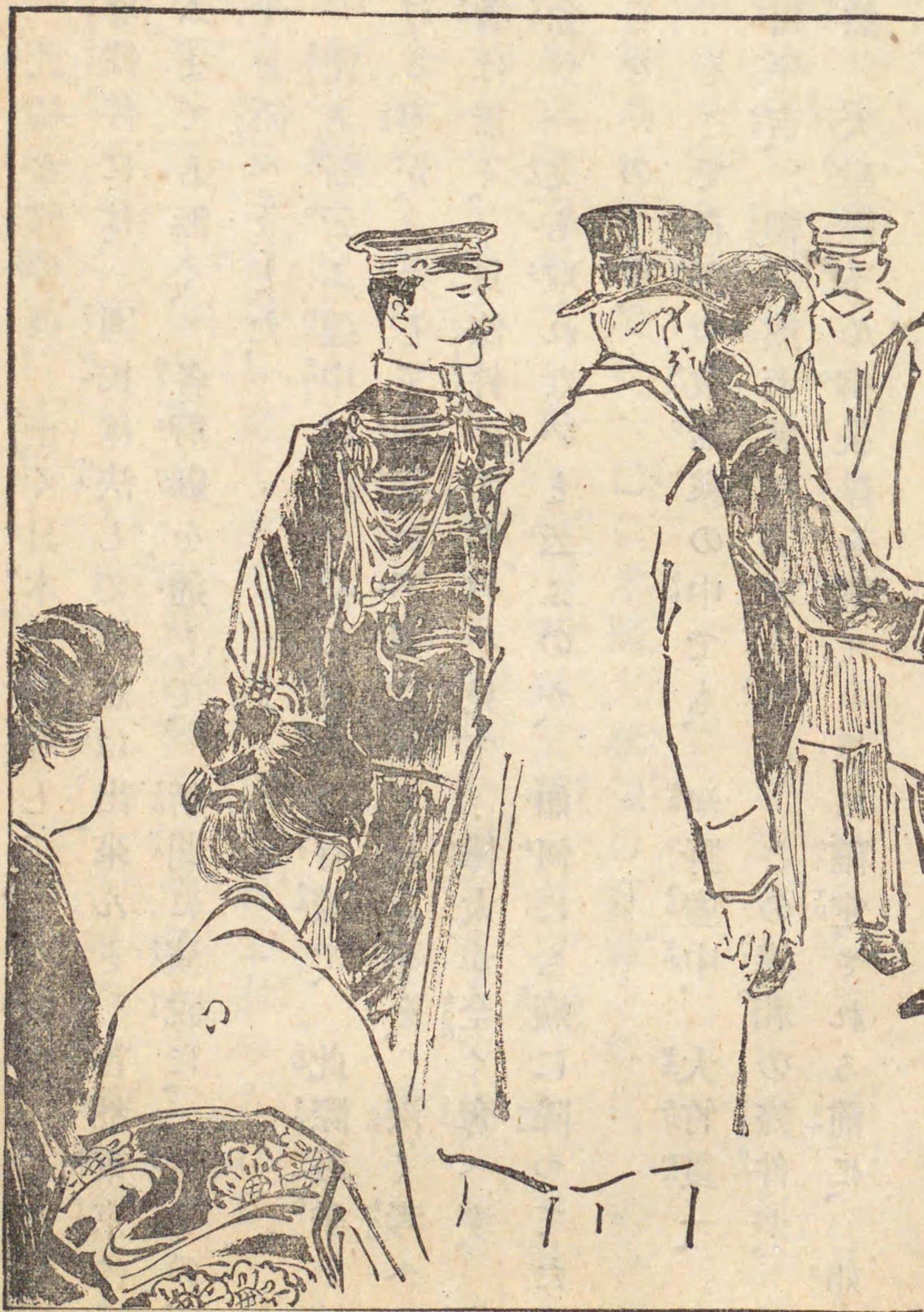
第十章 國民の激昂

是より先、我が帝國の國民は、平和風の吹き初めたのを

媾和反對の聲

聞いて、實はあまり喜びませんでした。それは、折角戦争を開いたのに、まだ敵國に達せぬ斗りか、哈爾濱ウラジオストツクをさへ取らないのに、今鋒を納めるのは、まだまだ早いと思つて居たのです。

然るに米國大統領の好意は、遂に我が政府を動かして、之に調停の事を頼み、其地で媾和談判を開く事になりました。たので、何うなる事かと思つて居ります處へ、此の結了した條件で見ますと、折角兵力を以て占領した樺太は、南半分より取る事は出来ず、また我國の軍費には、已に國民の財布を絞つて居るのに、今斯く大勝を得て置きながら、償金は一文も取れないと云ふので、さあ黙つては居られませ



大 山 元 帥
の 凱 旋



屈辱條件

河野廣中等國民大會を開く

國民の激昂

五二

此様な條件は、全く日本が屈辱して居るのだ。こんな屈辱條件には、國民は決して同意は出来んと、首都東京は云ふまでも無く、各府縣を通じて、新聞に演説に、皆その不平を訴へました。

尤も斯云ふ連中には、今の日本の有様で、此際戦争を續ける事が、果して利益か不利益かと云ふ事を、深く考へる者は無く、只條件の面だけを見て、樺太が全く奪へず、償金が一文も取れないと云ふのが、如何にも癢に障つてたまらないのです。

そこで在野の政治家の中でも、河野廣中、大竹貫一、小川平吉、櫻井熊太郎などの人々は、この媾和の條件が、公然天皇陛下の御批准を経て、眞に確定される前に、如何

日比谷公園

警視廳

がして打破らうと思ひ、即ち九月五日を以て、東京の日比谷公園に、國民大會を開き、尙大演説會を開いて、屈辱媾和の反對を試みました。

然るに政府では、己に米國大統領の好意を容れ、我帝國の前途を案じて、兎も角も和議を結んだ以上、なまじ政治家が不平を鳴らして、無智の人民を煽動するのは、甚だ宜しくないと思ひますから、警視廳の手を以て、何でもこの會合を妨げやうとしました。

で、その會場に當て、あつた、日比谷公園の入口に、柵を結つて、入場を拒み、尙演説會をも解散しましたから、只さへ不平に堪へない人民は、いよく憤慨の度を増しまして、遂に警官に抵抗し、石を飛ばし、瓦を投げ、果は棍

第十章

五三

警察署の
焼討

戒嚴令

國民の激昂

五四

棒、日本刀を持ち出して、穩かならね舉動に及び、内務大臣の官舎を襲ふやら、國民新聞社を打壊すやら、果は巡査の派出所から、各區の警察署を焼討して、その爲めにさしもの花の都も、一時は修羅の巷に變する斗り、凄まじい勢になりまして。

かうなると政府も、只警察の力だけでは、とても鎮めきれませんから、急いでこの東京市中に、戒嚴令を敷きました。方々の辻々を、軍隊を以て固めさせ、尙國民が亂暴をすれば、用捨無く銃劍で撃ち据ゑると云ふ、恐ろしい權幕を見せますと、流石の人民も、軍人に恨はありませんから、これには抵抗する勇氣も無く、僅が二日の暴動で、後は水を打つた様に、鎮まり返つてしまひました。

上下の意
思疎通せ

敵國露西亞では、戦に敗けて内亂を招きました。然るに我日本では、敵に勝て置きながら、而も暴動が起りました。更に云ひかへて見ますと、國と國との戦争は、漸く和を結んだのであります。その代り國內では、互ひに戰亂を見やうとするのです。

これと云ふのも、畢竟今度の媾和の趣意が、よく國民の下々まで、通じて居なかつた故でありませう。が、元より我日本の國民は、斯程の熱情を持つて居ればこそ、又戦争にも勝たのであります。それを思へば、必しも咎めるには及びますまい。まして露西亞の虛無黨なぞとは、全く同し類ではありませぬ。

されば媾和の趣意も解かり、恐乍ら陛下の大御心も、伺

平定

日英同盟

大廟御參拜

國民の激昂

五六

ひ知る事が出来ましたから、一旦逆上せた感情も、漸く穩かになりまして、後には却つて平和を喜び、此の爲めに國旗を揚げて、祝意を表するに至りました。

これと同時に發表に成つて、大いに賀すべき事と云ふのは、日英同盟の結ばれた事です。この同盟は、已に前年に結ばれたのですが、今度の戦勝の結果として、更に親密なものとなつたのは、國民の大いに喜ぶべき事でした。

第十一章 大廟御參拜

さて明治三十七年の、二月十一日を以て開かれた、日露兩國の大戦は、越えて三十八年の九月、即ち二十個月目を以て、遂に平和と恢復するに至りました。

陛下の御稜威

第三回 伊勢行幸

此間海に陸に、日本は戦ふ毎に勝利を得て、只に露國の鼻を挫いた斗りて無く、全世界の國々をして、皆舌を捲か

しめたのであります。是れ元より我が日本男兒の、愛國の熱誠と、忠君の眞情とで固められた、勇氣の致す所でありますが、又遠くは皇祖皇宗の御懿徳、近くは大元帥陛下の御稜威に依らな

ければ、逆も此の大勝利は得られませぬ。是に於て、我が叡聖文武なる大元帥陛下は、この平和克復を機として、親しく伊勢へ行幸に成り、大廟へ御參拜の

事と成りました。蓋し陛下が、親しく御參拜に成つた事は、明治二年同じく五年、同じく十三年と、また三度より無いのですが、

十一月十四日

内宮外宮

大廟御参拜

五八

此度も亦特に行幸に成つて、親しく皇祖の御靈前に、平和克復の旨を告げ給ひ、その御加護の程を感謝あらせられるのは、まことに恐多い事でありませぬ。

時は十一月十四日、東京を御發輦に成りまして、伊勢へと御下向に成りましたが、供奉には伏見大將宮を初めとして、桂、清浦、田中、徳大寺の諸大臣、又参列員として、山縣参謀總長、山本海軍大臣、寺内陸軍大臣、伊東軍令部長なども、特にお召しになりました。

で、十六日には外宮を、十七日には内宮をと、それく御参拜になりましたが、十七日には生憎雨が降りましたけれども、陛下は事ともしたまはず、厳かに式を擧げさせられました。

御告文

勤王家へ御贈位

又、神靈への御告文は、先に御發輦の前に、陛下親ら作られたまうて、何人にも示し給はず、御奉告の後には復た御持歸りに成つたさうです。その如何なる事が認められたかは、絶て窺ひ奉る事は出来ませぬ。

かくて陛下は、此地に二日御滞在あらせられました。その間に、名古屋藩主徳川義直、南朝の忠臣結城宗廣、同親光、國學の大家加茂真淵、本居宣長、信長の父織田信秀等、凡そ十五名の人々に、勤王、愛國の事蹟を嘉したまひ、それく贈位の御沙汰を仰出されました。

是より先、彼の東郷大將は、例の日本海の大勝の後、再び出で、近海の防備に當つて居りましたが、休戦の令が下だりますと、一トまづ全艦隊を率ひまして、東京灣へ引揚



山田 画

會 陸 軍 歡 迎



東郷大將の參拜

十月二十三日

大廟御參拜
六二
げて来る途に、同じく伊勢灣へ入つて、各部下の將卒と共に、大廟の靈前に額づいて、無事の凱旋を奉告し、尙神靈の加護に依て、偉大の勳功を立てた事を、深く御禮申上げたのです。

やがて東京灣に入りましてから、東郷大將は直に參内して、凱旋の挨拶を申上げ、優渥なる勅語を賜はりましたが、次いで大元帥陛下の御親閱の下に、盛んな觀艦式が行はれました。大小數百の軍艦が、東京灣の全面を壓して、晝は花のごとき滿艦飾に、夜は錦を欺くイルミ子シオンに、我が帝國海軍の、如何に雄大なるかを示したのは、實に未曾有の壯觀でありました。但しこれは伊勢行幸の前、即ち十月二十三日であつたのです。

滿洲軍の凱旋

六七十萬

第十二章 滿洲軍の凱旋

海軍の凱旋に次いで、陸軍は續々と凱旋して來ました。之に對して國民は、殆んど狂奔する斗りに、歡んで之を迎へました。

首都東京は云ふに及ばず、各府、各縣、津々浦々に至るまで、迂には凱旋門を建て、軒には國旗を掲げ、イルミ子シオンを點け、鬼灯提灯を釣り、出来る丈の手を盡して、凱旋の勇士をば、争うて歡迎しましたのは、この年月戰場に在つて、千辛萬苦を経て來た軍人も、定めし満足でありましたらう。

然し滿洲軍は、其數四軍を通じて、殆んど六七十萬にも

總司令部
引揚十日
二月七日

滿洲軍の凱旋

及んで居ります。此の大軍を引揚げるのは、蓋し容易では
ありません。

されば總司令部の如きも、年を越えてからでなければ、

とても凱旋出来ないのでしたが、これは大元帥陛下から、

大山總司令官へ、特に優渥なる詔勅を賜はりましたので、

俄に期日を繰り上げ、十一月二十五日奉天を引揚げ、十二

月の七日には、めで度く東京へ凱旋しました。

總司令官が新橋に着きますと、宮中から特に御馬車が出

て居りますので、一行はこれに乗りますと、直ぐに参内し

て、大元帥陛下の御前に、戦鬪の経過を奏上し、別殿で酒

饌を賜つて、やがて参謀本部へ向ひ、此所でも凱旋の祝杯

を舉げて、初めてそれらの家に歸へりました。

下賜物

第一軍の黒木大將、第二軍の奥大將、第三軍の乃木大將、
第四軍の川村大將、北韓軍の三好中將など、これと相前後
して、何れも無事に凱旋しましたが、その東京に入つた時
の模様は、何れも大山元帥の時と同じく、必ずまづ参内し
て、陛下に御挨拶を申上げ、陛下はまたこの人々に、一々
難有い御言葉と共に、種々の下賜物を賜はりました。

又東京の市民等は、この滿洲軍の凱旋を待つて、幾度も

盛んな歓迎會を開き、その勞苦を謝しましたが、其都度に

唱へた『萬歳』は、天に鳴り、地に響いて、彼の滿洲の野に於

ける、砲彈、地雷の轟きを、面り聞く斗りでありました。

大日本帝國 萬歳！
陸軍 萬歳！

滿洲軍の凱旋

海軍 萬歳!

大元帥陛下萬歳!!!

少年日露戰史第十六編 完

御聖徳の一斑

十一月十五日 龜山驛

少年讀本 軍國讀本 第十六

巖谷小波編

一 御聖徳の一斑

我が今上皇帝陛下の、叡聖文武に渡らせられ、御歴代の天皇の中にも、稀有の明天子に御在します事は、今更申すまでもありませんが、此度平和克復に付いて、伊勢大廟へ御参拜あらせられた時にも、その御聖徳を仰き奉るべき、難有い御逸話は、決して少くはありませんでした。

丁度十一月十五日の事でありませんと、御料の列車が伊勢路へ入つて、龜山の驛に御着きになりますと、例に依つて奉

御聖徳の一斑

傷病兵に
御會釋

少年日露戦史附録

迎の者共は、停車場の内外に充ちくつて、最敬禮を表して
居りましたが、中にもプラツトホームの一隅に、隊伍を組
んで起立して居りますのは、何れも片手を落し、片足を失
ひ、或は肉落ち、色蒼ざめた、傷病兵の一隊であります。
陛下はこれを御覽に成ると、傍の侍従を顧みさせたまひ、
『彼の者等は、皆今度の戦争に出で、あの通り負傷致した
者か？』
と御下問になりましたから、侍従は其由を御答へ申上げま
すと、陛下はつと身を起させられ、殊更に窓側まで御進み
に成つて、而も御默禮あらせられました。
思ひ設けない御會釋に、兵士は一同恐れ入り奉り、誰號
令を掛けるとも無く、重ねて最敬禮を行ひましたが、中に

津停車場

はあまりの光榮に、
『ア、斯うまで御心を碎かせたまふ乎。あゝ難有き御思
召かな！それを思へば我々の、なまじ命を棄てずに歸つ
たのは、面目の無い次第である。』
と、忠奮の涙に咽んだ者もありました。
また津の停車場では、其地の高等官等のプラツトホーム
で拜謁に出ました中に、高等女學校教諭の一女史の姿勢も
正しく、進退度に適つて居るのを、殊の外御感あらせられ、
これも特に侍従に仰せられて、姓名、履歴を御取調になり
ました、此等はやがて御還幸の後、皇后陛下、皇太子妃殿
下及各内親王殿下への、御土産話に成し給ふのでありませ
う。斯る匆卒の間にも、よく下情に御心を留め給ふのは、

御聖徳の一斑

山田

御精勵

小村全權大使

少年日露戦史附録

何と難有い御思召ではありませんか。

されば山田へ御着の後も、長途の御疲勞を事ともしたまはず、深更まで御精勵あらせられ、翌十六日には、早朝から直に御参拜あり、御還幸の後には、謁見、献上、天覽などと、殆んど寸時の御暇もありませんでした。が、それにも更に倦みたまはず、殊に國中の産物には、細大漏さず御目を注がせられ、あれよこれよと。親しく御選擇の上、數多御買上になりましたのも、皆殖産興業の事を、之に依て御奨勵あらせたまふ、深き大御心より出でた事と、仰ぎ奉るの他はありません。

二 小村全權大使

臺 曠れの舞

日露の戦争は、世界の歴史が出来て以來、又と無かつた大戦でありました。

さればその終局に當つて、當然行はれた媾和の談判も、亦世界に未曾有の、大切な談判で無ければなりません。彼の東西の各國が、この大事件に際して、前の大戦争に對すると同じく、等しく目を刮てましたのも元より然る可き事でありませす。

之を譬へて云へば、この媾和談判こそ、世界中の見物を對手にした、曠れの大芝居でありますから、随つてこの舞臺にも、第一流の役者が出なければなりません。

見給へ露國の大使として、その全權を委ぬられて來たのは、彼國でも有名な政治家、伯爵井ツテでありました。こ

小村全權大使

非凡の技

少年日露戦史附録

れに對して、我が國から選まれて出たのは、果して如何なる人でありましたらう？、
 時の外務大臣、男爵小村壽太郎、即ちその人なのであります。
 蓋し小村は、我が國の國務大臣としては、まだ第一流では無かつたかも知れませんが、其外交に於ける手腕は、己に非凡の技量を現はして、入ては外務大臣、出ては全權大使として、國家の大事に與かると云ふ、最も重い役目を負ふのは、現在この小村を措いて、他に誰もありません。
 まいとは、己に何人も認める所でした。
 されば、叡明なる天皇陛下も、特に小村を御召出しに成つて、今度の大任を委ねさせられました。小村はまたこれ

大學南校

に對して、よく大御心に酬ひ奉る丈の、役目を立派に仕遂げたのであります。
 偶々その談判の結果が、國民の豫め望んで居た所と、十分に符合しなかつた爲めに、直ちに外交の失敗を罵られ、大使の無能を嘲られたのは、戦争の目的と、國勢の現状とが、十分知れ渡つて居なかつた故で、その事情が解つて見れば、實に氣の毒の至であります。
 この人は日向の産であります。後東京へ出て、大學の南校に入りました時から、己に望ある青年と認められ、やがて政府から選まれて、亞米利加へ留學に遣られました。然るに小村は、その身軀の小さなのに似ず、膽は至つて太い男で、學課の事にはあまり氣を留めず、頗る磊落に遣

小村全權大使

代理公使

公使館引揚の機敏

少年日露戦史附録

られましたが、それでも成績は人に優れ、その上記臆の好
 い事は、誰も舌を捲いた所でありませぬ。
 事に當つて機敏な事、また小節に抱泥せずして直ちに大
 局を見破る事は、その天性とも云ふべきで、實にこの小村
 の如きは、天性の外交家と云ふべきであります。
 北京に代理公使をつとめて居りましたが、例の鋭い眼光を
 以て、はやくも時局の迫るのを見て取り、断然平和の破れ
 るを期して、中央政府の命をもまたず、矢庭に公使館の國
 旗を捲いて、天津まで引拂つた働きは、さながら電の人を
 射る如く、正に天下を驚かしたのであります。
 また北清事件の時も、公使として北京にありましたが、

列國公使の恐怖

韓國統監

日本の保護國

列國の公使達も彼の手に置かれて、『底の知れぬ氣
 味の悪い男』と、何れも恐怖を抱いて居りました。
 かほどの英雄であります、見た所はまるで女の様で、
 彼の井ツテの前に立つと、又子供の様にしか見えません。
 それでも彼に拮抗して、よく談判を纏めたのは、實に驚
 くべき技量であります。

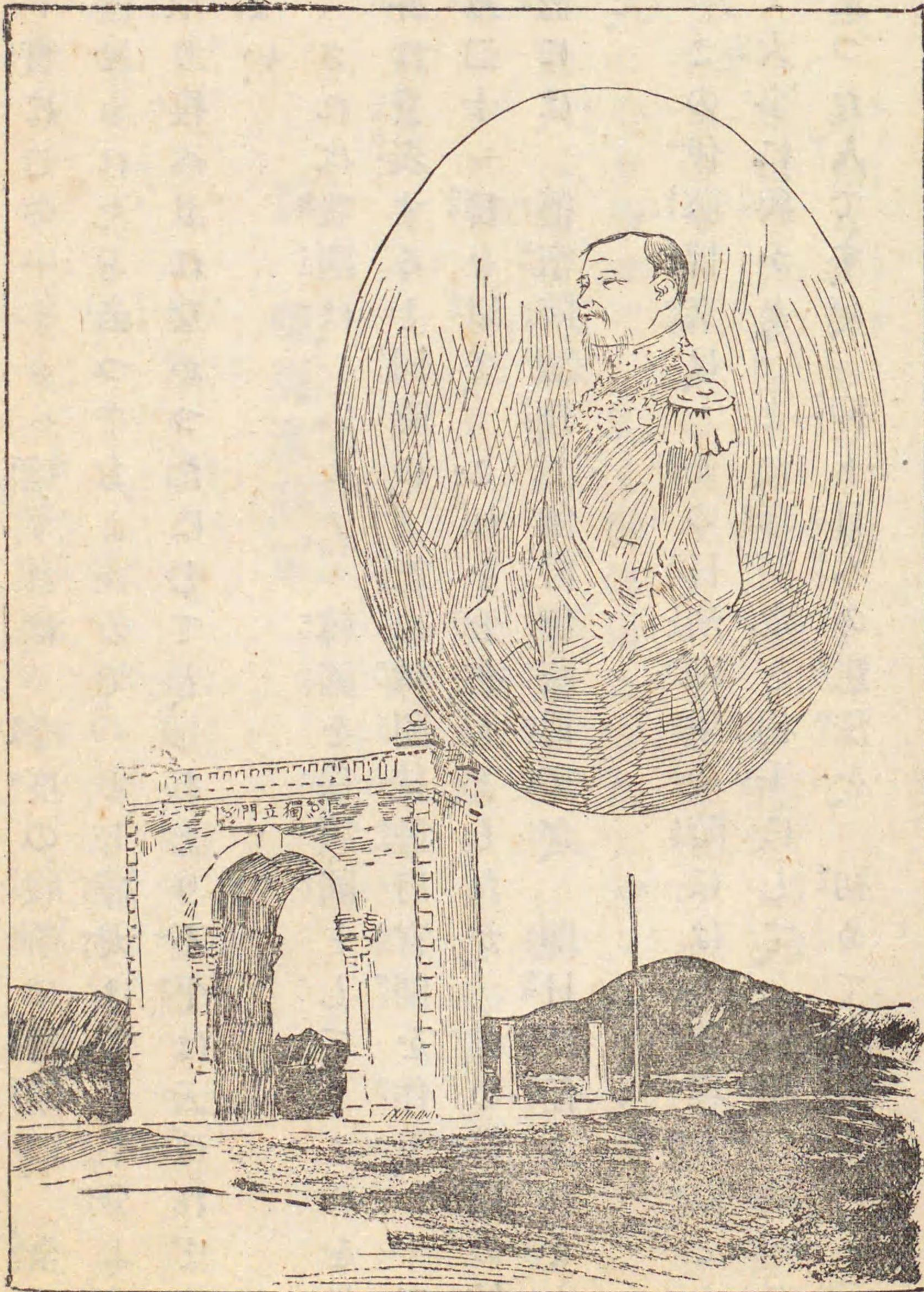
三 韓國統監

朝鮮即ち韓國が、我大日本國の保護に依つて、初めて獨
 立を全うする様には、今度の媾和談判の、抑も第一條に
 提出された條件です。
 蓋し韓國と我國とは、眼と鼻との間と云ふよりも、寧ろ

韓國統監

伊藤
統監
韓國

韓 國 統 監



齒と唇

三國干涉

我が保護
國

少年日露戦史附録

一〇

齒と唇との關係であります。されば韓國にして、若し獨立の力を失ひ、他國の侵略する所と成つた日には、我が國は唇を剥がれた齒の如く、一日も安き心はありません。彼の二十七八年の役、また今度の戦争の如きも、その敵手こそちがへ、元は皆韓國の獨立の爲め、又我國の安全の爲めに、正義の軍を起したに過ぎません。

されば先には清國に勝つて、一旦目的は達しましたが、例の三國干涉に依つて、折角の戦勝もその効を失ひ、やがて又露國の爲めに、再び韓國の地位を危くしました。そこで我國は、更に進んでこの露國を懲らし、遂に今度の大勝を得ましたから、茲に初めて韓國を、公然我が保護國として、一切我手に世話をする事に成つたのです。

十二月二日
統監府官制
發布

日本の憲法

少年日露戦史附録

實にこの一事さへ達すれば、今度の戦争の目的は、全く達せられたと云つてもよいので、よし樺太は僅か半分より取り復へされなかつたにしても、あまり不平は云はれずまい。

されば我國は、いよく韓國を保護國として、これを世界に發表すると同時に、新に韓國統監府官制を作り、十二月二十一日を以て、これを公布しました。その韓國の統監には、樞密院議長、侯爵伊藤博文が、即日親任されました。

この伊藤博文は、先の日清戦争の時には、總理大臣として大事に與かり、また李鴻章を相手にして、媾和の談判に當つた人ですが、抑も日本の憲法を、初めて編制したと云

陛下の御信任

韓帝の御信用

噫廉潔將軍

乃木司令官

ふ、非常な功勞のある人です。

されば天皇陛下にも、多くの元老大臣の中で、一番御信任あらせられるのですが、また韓國の皇帝も、常から此人に心を寄せて、深く御信用あつたと云ふ事です。

此人にして此任に當り、親しく韓國に渡つて、今その職を執るに至りましたのは、韓國の爲めまた我國の爲め、共に賀すべき事ではありませんか。

四 噫廉潔將軍

世界無比の堅塞と聞えた、旅順の敵を屈服させて、更に勇名を天下に轟かした、第三軍の乃木司令官は、數ある日本の名將の中でも、一際氣風の變つた、頗る廉直に、而も

噫廉潔將軍

命率直の復

少年日露戦史附録

一四

高潔な人でありました。されば將軍は、目出度帝都へ凱旋して来て、大元帥の御前に伏し、戦鬪の経過を奉上するのにも、決して言葉を飾る事無く、

『彼處の戦争は、全く味方の敗北で御座りました。是も私の計略か誤つて居た故で御座ります。』

『此處の強襲は、反つて敵に撃退されまして、恐多くも陛下の忠良なる兵士をば、幾千となく失ひました。まことに申譯が御座りません。』

と、有の儘に申上げて、其の御咎めを待ちました。然るに寛仁なる陛下には、更に其罪を問ひ給はぬのみか、却つて卒直な將軍の奏上を嘉したまひ、結構なる金時

下賜金の分配

計に添へて、御手元金六千圓を賜はつたのです。すると將軍は、身に餘る光榮として、恩賜の金時計は、其儘我が家の佛壇に飾り、先に戦場の露と消へた、二人の子息の靈にも、この恩澤を頒ちましたが、六千圓の金の方は、一錢たりとも自分には取らず、皆これを金時計に代へ、その上に、『頒恩賜』『第三軍紀念』の文字を誌して、先に生死を共にした、幕僚の者に配つてしまひました。

かう云ふ風でありますから、先に大切な二人の息子を、二人とも戦死させましたけれども、更に悲しむ色は見せず、その葬儀の如きも、永らく見合はせて居りましたが、諸軍の凱旋が大方濟んで、部下の戦死の弔祭も、それ〴〵懇ろに行はれた後で、初めてこの二人の爲めに、墓を建て、花

噫廉潔將軍

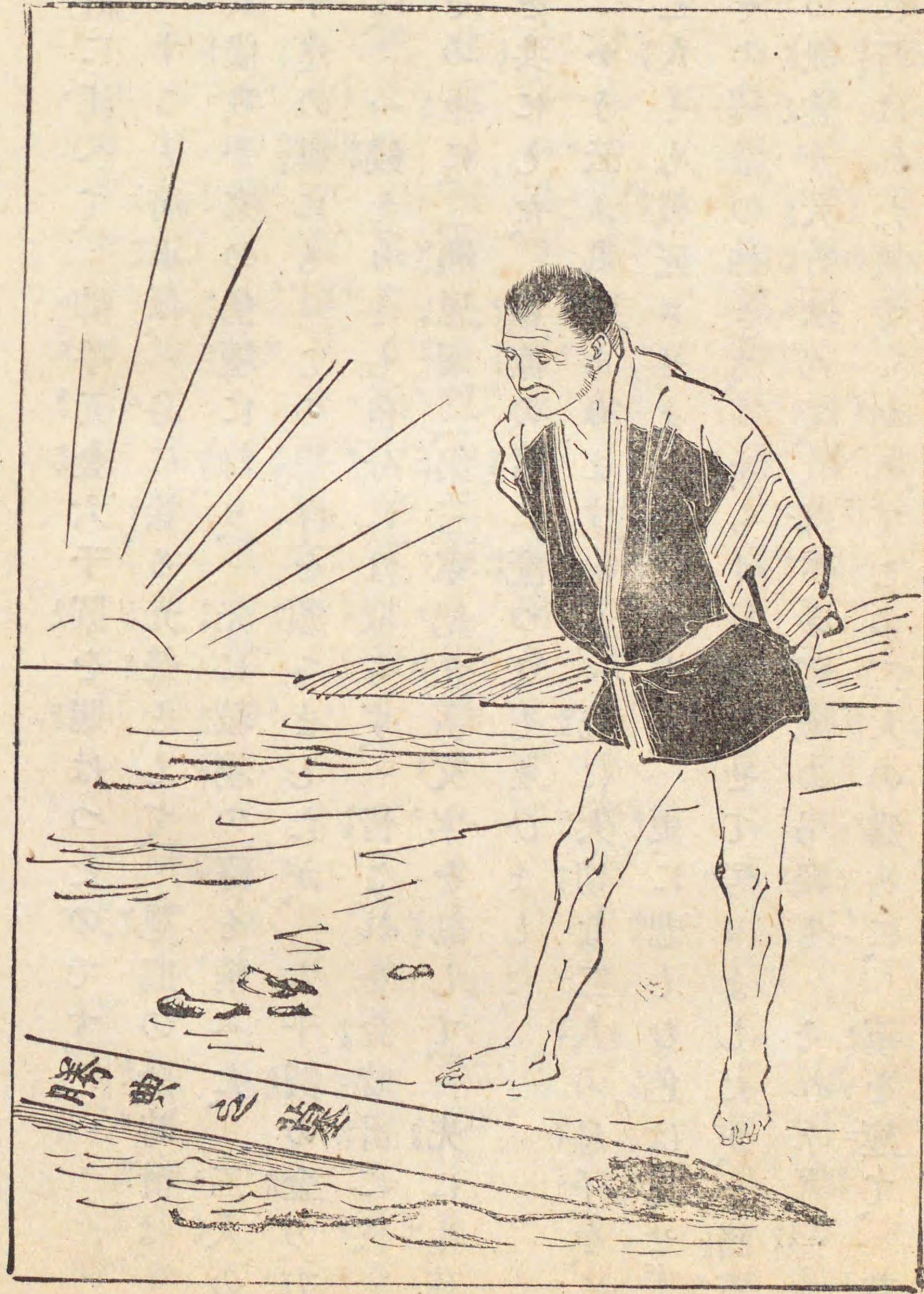
一五

墓標の漂着

を捧げて、嚴肅に其祭典を営みました。
 それに付いて不思議な事があります。時は丁度乃木將軍の、第三軍を率ひて凱旋し、恰も東京に入らうと云ふ頃のことです。和泉國濱寺の海岸に、見馴れぬ杭が一本流れつきました。土地の者が拾ひあげて見ましたら、その上に、『故陸軍歩兵少尉從五位乃木勝典之墓』と、文字も明かに誌されてあります。
 思ふにこれは、先に少尉の戦死の當時、南山附近の假埋葬地に、初め立てられたものでありませうが、其後本國へ送られる時に、誤つて船から落ちて、やがて潮流に漂ひながら、偶然にも此所へ流れ付いたのでせう。
 それにしてもこの墓標の、途中で朽ちず、挫けもせず、

噫廉潔將軍

乃木少尉墓標の漂着



少年日露戦史附録

而も父將軍の凱旋を追うて、郷國日本の海岸に着いたとは、何と不思議な話ではありませんか。

凱旋土産の怪獸

五 凱旋土産の怪獸

各軍の司令官の、相次いで凱旋した度に、それ／＼土産はありましたが、中にも第四軍、即ち鴨綠江軍の、川村大將は、珍らしい凱旋土産を持つて歸りました。

それは牝の山猫で、全身黒と樺色との班紋のある、珍らしい動物であります。これを捕へて歸へるには、又面白い話があるのです。

一體この山猫は、鴻綠江の海岸に棲んで、屢々人畜を惱ますと云ふ、獍猛な野獸であります。軍が滿洲の福陵に

山猫

鴨綠江軍

生血

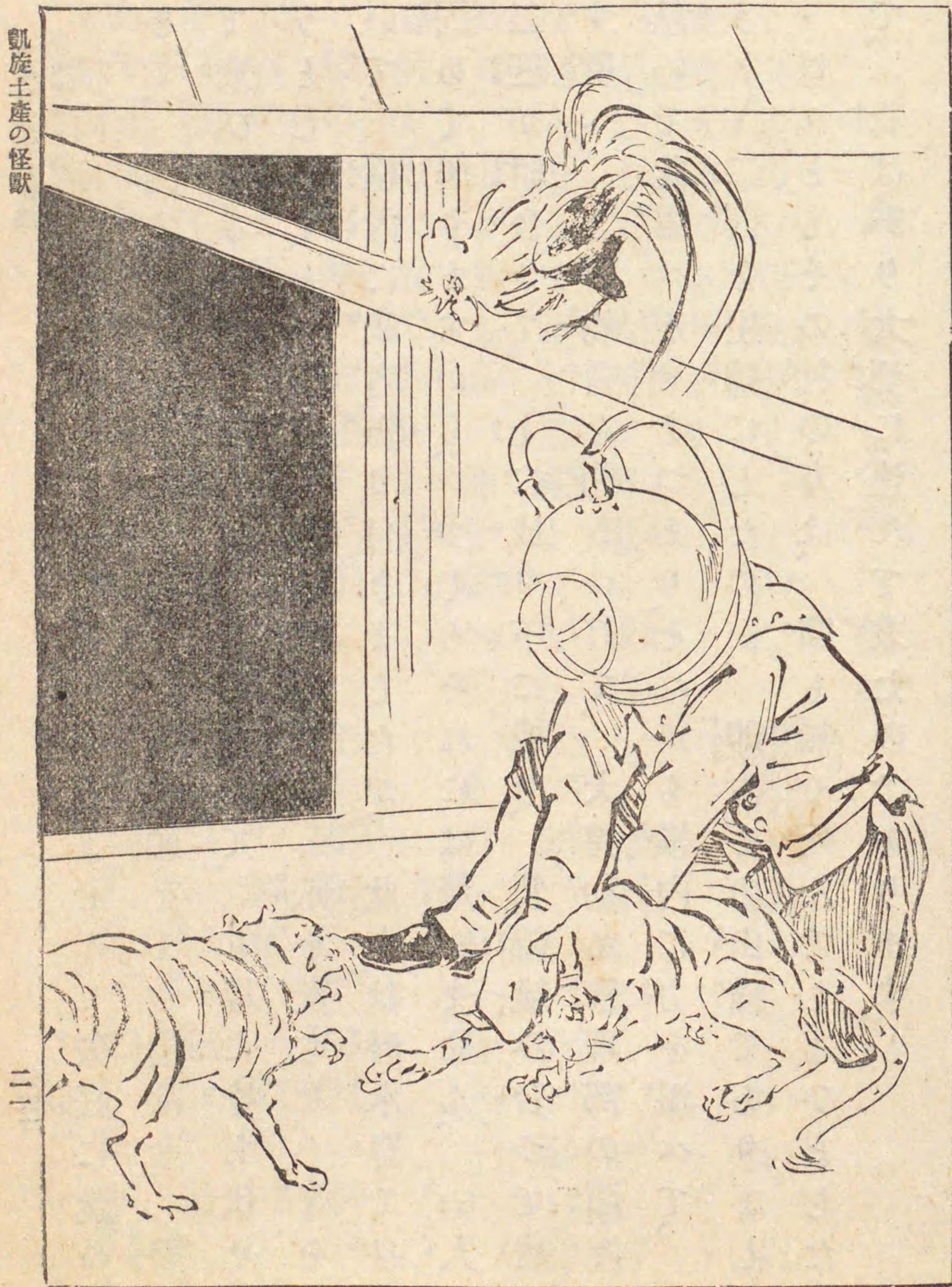
從卒横内由十

舍營して居る時分、管理部の附屬の鶏小屋へ来て、夜な夜なその生血を吸ひ、初は五羽か十羽宛であつたのが、追々に増長して、果は一夜に十五羽も斃すに至りました。管理部の役人は、初は馳か貂の所爲と思ひ、陥穴や釣罾を掛けましたが、一向効驗の無い斗りか、損害はますます多くなり、遂に懸賞を以て、遍く捕獲法を募る事に成つたのです。

此時これを聞き込んで、自ら名乗つて出ましたのは、川村大將の從卒で、横内由十と云ふ剛の者でしたが、進んで大將の前に出で、

『この怪獸退治を、何卒私に仰せ付け下さい！』と頼みますから、『面白い、やつて見ろ！』と云ひますと、や

山猫退治



凱旋土産の怪獣

潛水器

息を殺して待つ

少年日露戦史附録

二〇

が横内は、まづ頭から潛水器を冠り、手には一面に釘の植ゑてある、厚皮の手袋を穿めまして、宵の中から鶏小屋へ入り、莖やアンペラの下へ潜つて、息を殺して待つて居ました。

すると、やがて夜も更けて、四邊も静まり返つた、午前二時と覺しき頃、小屋の天井がミシ／＼と鳴り出し、やがてメリ／＼と云ふ聲と共に、板をはがす者がありますから、『スワ曲者御座んなれ！』と、私かに莖の下から見ますと、こは如何に！二つの星を並べた様な眼は、闇の中にも人を射る斗り。鼻を動かし、咽喉を鳴らして、鶏籠の方へ進みよる後から、又も光る二つの星は、正しく二匹連れと見えます。

二匹連れ

死物狂

生捕

少年日露戦史附録

横内は此體に、今は何の猶豫をしませう。矢庭に跳ね起
 きて、例の釘を植ゑた拳に、二匹の頭をまづ喰はせ、驚い
 て飛び上る所を、左右の腕に引抱へて、其場に捻ぢ伏せや
 うとしますと、先方も死物狂の勢ひ、爪を反らせ、牙を剥
 いて、横内に武者振り付きましたが、此方は潜水器で身を
 固めて居りますから、少しもそれには驚きません、一人と
 二匹が組合つて、上に成り下に成り、暫時挑み合つて居ま
 す所へ、この物音を聞きつけて、大將初め管理部の面々は
 急いで此場へ走せあつまり、それから横内に力を添へて、と
 う／＼二匹を生捕にしたのが、即ちこの山猫でありました。
 けれどもその牡の方は、間もなく死んでしまひましたの
 で、牝ばかり大切に連れて來たのであります。

東郷大將の徳望

世界一

大廟に参詣す

六 東郷大將の徳望

今度の日露戦争で、世界に一番名を轟かしたのは、蓋し
 東郷大將でありませう。
 是必しも、大將が海戦に成功し、武器に富んで居た斗り
 ではありません、畢竟その人と成りが、海よりも深い情を
 持ち、山よりも高い徳を備へて、その一舉一動が、よく人
 を動かした故であります。
 彼の東京灣に凱旋する前に、特に艦隊を伊勢灣に繋いで、
 大雨の間を事ともせず、親しく大廟に参詣し、戦争中の天
 佑に對して、深く拜謝し奉つた事は已にその謙徳の程を示
 して遍ねく人を感じしめたのであります。やがて東京に

東郷大將の徳望

祭文

十月二十九日
青山齋場

東郷大將の徳望

凱旋の後は、自ら進んで發企者と爲り、十月二十九日を以て、青山の齋場に、海軍死歿者の靈を祭り、またその遺族を招待して、懇ろにこれを慰めました。

式場は軍神廣瀬中佐の墓に隣つて、廣場に新たに設けられたのですが、正面には『海軍死歿者靈位』と記した、白木の神位を置き、これに供物を山の如く供へて、頗る手厚い祭典を行ひましたが、その時大將は、自ら左の祭文を朗讀しました。

海陸の戦雲已に散じて、満都の和氣霽々、童幼驩び迎へて、六親門に待つ、是れ諸子と生死を共にしたる將卒が大轟の下に凱旋せる頃日の光景なり。回想すれば、諸子等が冱寒を冒し、炎營を凌ぎ、屢々勁敵と戦ふに當りて

東郷大將の同情

少年日露戦史附録



忠死の榮

少年日露戦史附録

や、戦局の前途は、尙ほ未だ知るに由なく、諸子の逝く毎に先づ其忠死の榮を得たるを羨み、我等も亦必ず諸子に倣ふて、君國に報ふるを期せり。然るに諸子等の勇戦奮闘は、常に其効果を奏し、皇軍戦ふ毎に勝たざることなく旅順の連陣十閱月にして大勢を定め、日本海の鏖戦、一舉に勝敗を決し、爾後海上又敵影を見ざるに至れり。是れ固より無量の皇徳に基くと雖、又諸子等身を外に忘れて、奉公したるの致す處ならずんばあらず、今や征戰其終を告げ、我等凱旋の將卒、回顧驩喜の光景を見るに當り、諸子と此悦を頌つ能はざるを懐ひ悲喜交々至りて、感慨云ふべからざるを覺ふ。然れども、今日あるは即ち諸子が一死の榮ある所以にして、諸子の忠烈は、永

遺族感泣

く我が海軍の精神と爲り、帝國を無窮に守護せん、茲に典を擧げて諸子の靈を祭り、聊か懷を陳べて弔詞に代ふ、尙はくは來り饗けよ。

明治三十八年十月 聯合艦隊司令長官 東郷平八郎
 大將が謹嚴なる音調を以て、この祭文を読みあげた時は、さしにも広い式場も、さながら水を打つた様に、肅然として静まり返へり、只其所此所の隅に、啜泣の聲を聞く斗りでした。

やがて式が了はりますと大將はまた遺族席へ行つて、父に殘された子や、夫に別れた妻などに一々丁寧に會釋して、懇ろに慰めて廻はりましたが、その同情の深いには、またこの遺族の人々の、等しく嬉涙に暮れた所でありませぬ。

東郷大將の徳望

寺崎上等兵水中の働き

砲兵上等

少年日露戦史附録

七

寺崎上等兵水中の働き

二八

北韓軍が彼の洪水に出合つて、行進に頗る困難を甜めた事は、己に戦史にも説いた通りで、實にこの三好兵團は、露兵より、寧ろ洪水と云ふ敵と、非常に苦戦をしたのであります。

茲にこの軍の中に、砲兵上等兵、寺崎文太と云ふ、稀代の勇士がありました。

時は二十六日の午前一時頃であります。此間からの大雨に、溪流はますます溢れて、濁浪は兩岸に漲り、兼て本隊から先に進んで、對岸に宿營して居た、彈藥縦列の一隊は、今にも洪水に前後を阻てられて、進退谷まる場合になつた

今にも押し流さんとす

水泳の達人

のです。

その中にも兵員は、自分達の預つて居る彈藥を、水に濕らしてしまつては、何の役にも立ちませんから、一心にこの豫防をして居りますと、その中に橋は浪に揺られて、今にも押し流される斗りになりました。

すると寺崎上等兵は、橋の此方からこれを見て、何で猶豫して居りませう、今にも落ちやうと云ふ橋桁の上を、我を忘れて飛んで行きました。案の定橋は落ちて、見る／＼中に上等兵は、逆捲く浪に捲き込まれました。

けれども、上等兵は、元より水泳の達人ですから、その激流をも事ともせず、拔手を切つて對岸に渡り、其所に働

寺崎上等兵水中の働き

二九

十餘名の戦友

勇氣を失ふ

少年日露戦史附録

三〇

いて居た十餘名の戦友に、急いで本隊に歸へれと傳へました。だが、この水勢の恐さしには、流石に皆顔色を變へて、進んで渡らうと云ふ者がありません。

上等兵はこれを見て、

『なんのこれしきが怖いものか。みんな乃公に續け〜！』と、或は罵り、或は勵まし、先づ進んで溪流を渡り、用意の綱を繋ぎ合はせて、その一端を岸の樹木に着け、これを力に一同を渡らせて、第二流から第四流まで、何れも無事に越えましたが、やがて第五流まで来ますと、此所は、水が深いので、水泳を知らない三人の兵士は、進んで渡る勇氣を失ひ、途方に暮れてしまひました。

けれども棄て、はおかれませんか、寺崎はやがて一策

途中の危険

凱旋の歌

を案じ、まづ自分の腰に綱をつけて、この水中を泳ぎ渡り、辛くも對岸の樹木の根へ、これを堅く括りつけ、水泳の出来ない者には、一々自分が付き添つて、途中の危険を防ぎながら順々に渡らせましたので、僅か七八町斗りの所を、三時間餘りもかかりましたが、それでもこの十餘人の中、一人の怪我をした者も無く、皆無事に歸る事が出来たのは、全く勇敢なる上等兵の非凡な水泳術の賜物だと云つて、この時の兵士達は云ふまでも無く、後には隊長の面々も、皆その功勞を稱へまして、感心しない者はありませんでした。

八 凱旋の歌

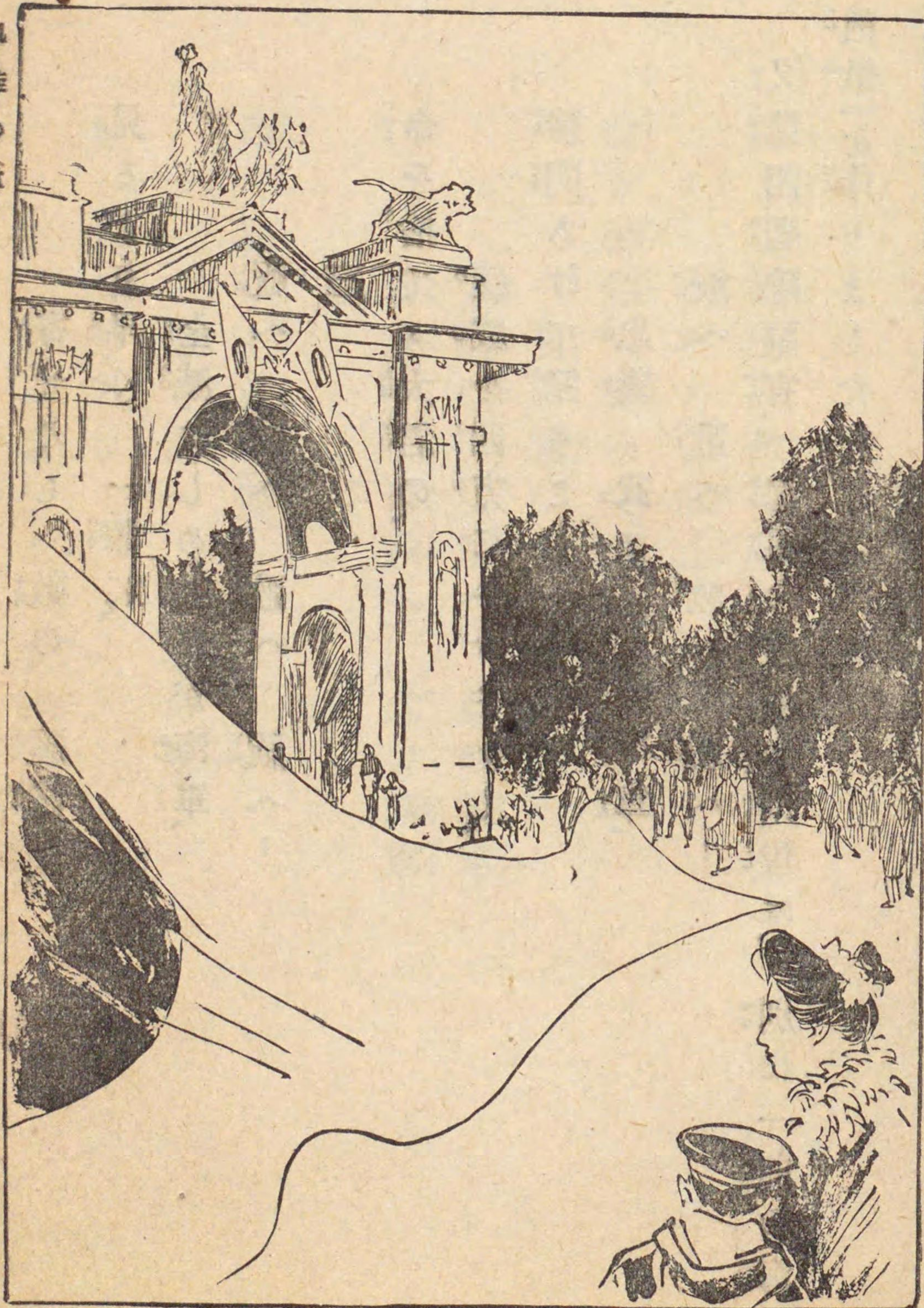
皇軍の凱旋を祝し、この大勝を千古に傳へる爲めに、唱

凱旋の歌

三一

上野の凱旋門

凱旋の歌



大和田建樹の作

少年日露戦史附録

歌の新しく出来た事は、實に夥しいものでありました。その中に就いて、最も廣く行はれ、遍ねく歌はれましたのは、文部省の命に依つて、大和田建樹の作つた歌であります。

一 雲霞の如く目にあまる、

敵軍遠く打ち拂ひ、

向ふところに日の御旗、

立てぬ方なきわが陸軍。

祝へ 歌へ 祝へ

二

鯨鯢波に横たへて、

全滅

坂本少佐の作

少年日露戦史附録

見るより早く一撃に、敵の艦隊を、
全滅せしめしわが海軍、
祝へ 歌へ 祝へ！

命を捨て、大君の、
稜威を四方にかゝりかし、
勝鬨あげて歸りこし、
忠義 武勇の陸海軍、
祝へ 歌へ 祝へ！

又第四艦隊副官、海軍少佐坂本則俊は、別に一曲の海軍凱歌』を作りました。

尊き御詔

討てよ武士 敵の船！
攻めよ武士 敵の城！
尊き御詔 畏みて、
我將士！

皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！
皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！
皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！

豫て捧げし此身體、
豫て鍛へし この腕、
續かん限り戦ひて、
勇み奮ひし 我將士！

凱旋の歌

旗色増す御

録附 軍國讀本卷の十六 完

凱旋の歌

色増す御旗示さんと、

勇み奮ひし 我將士。

皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！

皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！

敵艦跡無し

少年日露戦史附録

三 皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！
皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！

敵の據りたる堅城も、

敵の頼みし 艦隊も、

攻め亡ぼして跡も無く、

勇み奮ひし 我將士、

皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！

皆祝へ 皆歌へ 此の勝軍！

四 されば尊き大君に、

されば懐けき國民に、

少年日露戰史 完

自第一編至第十六編

明治卅九年四月十四日印刷
明治卅九年四月廿七日發行

凱旋の卷

定價金拾貳錢

編者 巖谷季雄

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

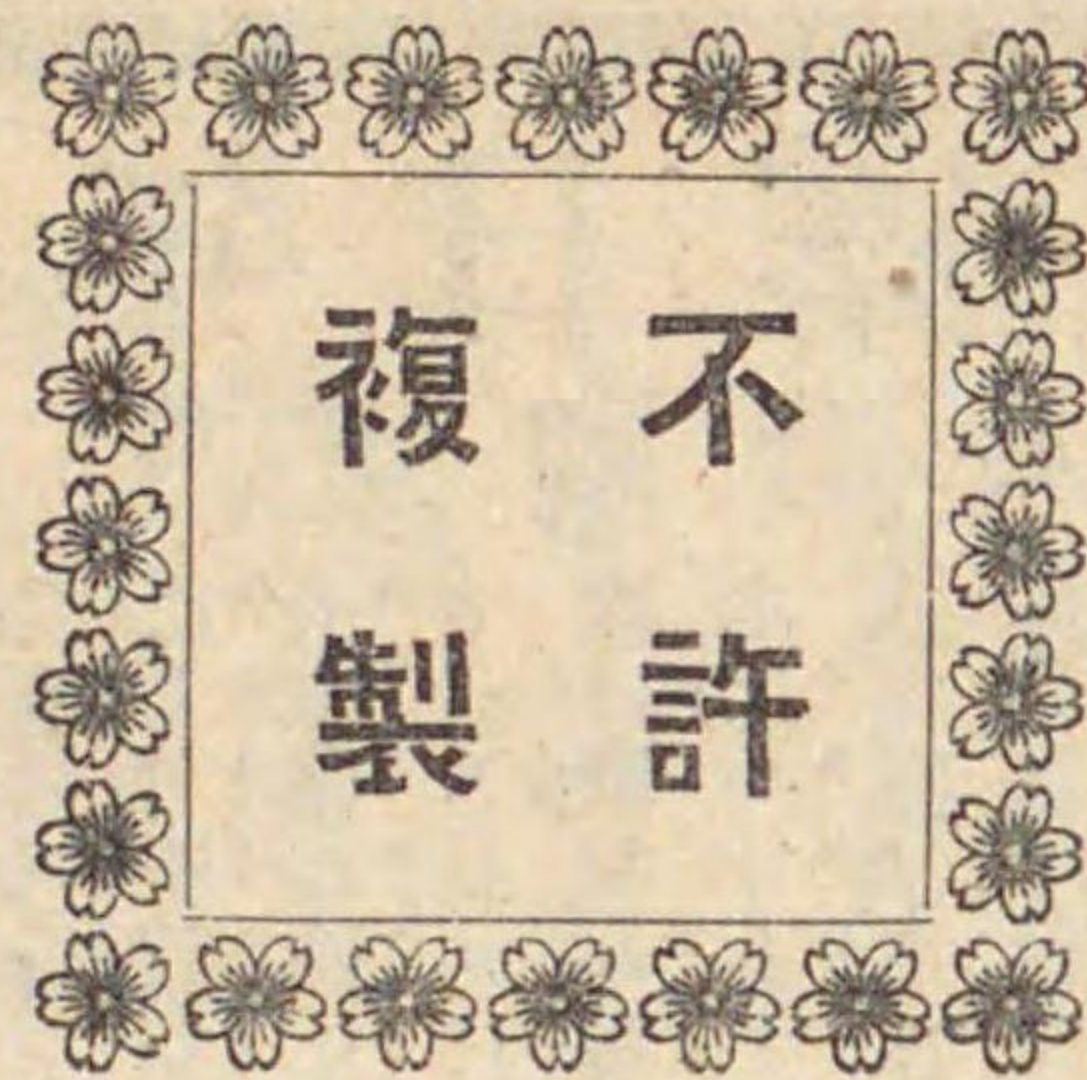
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 山田英二

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



洋装背クローズ大判毎編百有餘頁

少年日露戰史

附 露の戦争を書いた本であります。附録軍國讀本は、日露戦争に關係した美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

著者 巖谷小波君 發行 博文館

一册拾貳錢郵税四錢十六册一圓六十錢

▲第一編 開戦の巻

△挿書……………古洞君書
戦争の起る原因 仁川の海戦 三國の干渉 旅順の攻撃 露國の無法 宣戰の詔勅 露西亞は何な國 國民皆兵 文明と野蠻の戦 新艦の到着 艦隊の出發 新艦の到着 附録 ●葉山の御夢 ●東洋のネルソン ●敵前の尺八 ●三殿下の御勇武 ●初花 ●下瀬火薬の事 ●初瀬の

▲第二編 決死隊の巻

△挿書……………年方君書
日韓の條約 第二回の閉塞 閉塞の計畫 閉塞の成効 決死隊の出發 マカロフの戦 決死隊の行動 行軍の困難 間接射撃 露艦の亂暴 驅逐艦隊の激戦 露艦の亂暴 附録 ●決死隊の歌 ●勇士の膝枕 ●機關 ●兵の沈勇 ●軍神の歌 ●氷割の勇士 ●大切な軍艦旗 ●子供好きの中尉 ●斥候の犠牲

▲第三編 九連城の巻

△挿書……………金秋君書
鴨綠江の地理 蛤蟆塘の激戦 海軍の掩護 敵兵の同討 架橋の大砲戦 諸兵の苦心 江上の大砲戦 捕虜の厚遇 九連城の陥落 鳳凰城の占領 附録 ●黒木大將 ●牧澤中隊の苦戦 ●九連城は占得たり ●大膽な斥候 ●士官 ●武士の情 ●裸體の勇士 ●志士の不運 ●戰場物語

▲第四編 南山の巻

△挿書……………洗麟君書
第三回の閉塞 南山の大激戦 閉塞の成効 南山の占領 上陸の困難 第二軍の名將 普蘭店の鐵道破壊 青泥窪占領の奇功 大戦前の小衝突 鳴呼吉野、初瀬 附録 ●南山攻撃 ●伏見宮殿下の御武徳 ●烏海艦長 ●勇猛士官 ●宮本武蔵 ●の末孫 ●苦戦の聯隊 ●友愛の嬉涙 ●決死の志願

▲第五編 得利寺の巻

△挿書……………國觀君書
恨は深き玄海洋 龍王廟の騎兵戦 常陸丸と佐渡丸 得利寺の激戦 和泉丸と羽後丸 中央隊の戦況 上村艦隊の苦心 左翼隊の戦況 第二軍の行動 右翼隊の戦況 得利寺とは何所 戦争の結果 附録 ●奥大將 ●君前の星野少佐 ●菅陸丸 (琵琶歌) ●不運なる上村艦隊 ●忠孝兩全 ●敵にも勇士 ●呼鳴須知 ●中佐 ●三富特務曹長の功名

▲第六編 摩天嶺の巻

△挿書……………國峰君書
大孤山上陸軍 摩天嶺の逆襲 岫巖の占領 二度目の逆襲 賽馬集の掃清 武運強き馬場大佐 張家石の激戦 橋頭の大戦 炎天の行軍 滿洲軍總司令官 分水嶺の戦闘 天の時と人の和 附録 ●第一軍の兩殿下 ●大庭少佐の ●詩 ●海門艦長の最後 ●滿洲の蠅 ●に餓死す ●兵にも豪傑 ●不思議

▲第七編 大石橋の巻

△挿書……………竹坡君書
熊岳城の逆襲 彼我の損害 蓋平の占領 營口の占領 大石橋の敵 橋木城と海城 砲兵の苦戦 橋木城と海城 右翼隊の苦戦 橋木城と海城 月下の血戦 伊豆沖の敵艦 附録 ●野津大將 ●日本人は日本人 ●詠詩三章 ●壯烈横山大尉の戦死 ●勇將の下に弱卒なし ●剛膽なる ●井上大尉 ●身を捨ててこそ極 ●樂もあれ ●脇腹に劍の尖

▲第八編 黄海の巻

△挿書……………清方君書
珍しや敵艦の出港 三笠の勇戦 水雷艇隊の夜襲 敵艦隊の敗走 哨艦の攻撃 逃走の敵艦 龍王塘と鮮生角 ノウキツクの最期 三驅逐艦の勇戦 蔚山沖の海戦 待ちに待った敵艦隊 リネーリックの撃沈 附録 ●勇壯なる博恭王 ●伊知地三笠艦 ●長 ●隠れた司令官 ●上村中將 ●軍國 ●の博愛 ●軍艦名寄の歌 ●寺島中尉 ●の組打 ●軍艦の説明 ●勇士水雷を 抱く

▲第九編 遼陽の巻

△挿書……………年峯君書
遼陽の敵 激烈なる追撃戦 三軍の連絡 野津軍の戦況 黒木軍の右縦隊 奥軍の活動 太子河左岸の占領 首山堡の苦戦 太子河右岸の激戦 悲慘なる關谷聯隊 名譽の岡崎山 遼陽城の日章旗 附録 ●梨本宮殿下の御仁徳 ●負傷した ●小川中將 ●學者將軍 ●名譽聯 ●隊の名譽 ●陸軍の軍神 ●勇 ●烈なる喇叭 ●池月少尉の最期 ●死して放さる武器

▲第十編 沙河の巻

△挿書……………古洞君書
敵軍の南下 旅團感情の嚆矢 大會戦前の小衝突 三塊石山の夜襲 本溪湖隊の苦戦 中央軍の成功 軍旗山の奮闘 左翼軍の進撃 閑院宮殿下の御偉勳 須永部隊の奇勝 右翼軍の左縦隊 沙河の對陣 附録 ●閑院宮殿下 ●軍旗に代る隊長 ●約東の見舞酒 ●猛將軍丸井政亞 ●令 ●嗚呼仁平中佐 ●水部副官の傳 ●樹上の斥候

世界歴史譚

釋孔耶	ビマニ	ハメニ	マホニ	漢高	岳高	コロン	ガバ	彼得	華聖	孔聖	グランド	ソラ	王陽
高山博士	吉國文學士	上田文學士	笹川文學士	大町文學士	阪本文學士	三浦文學士	島田文學士	飛田文學士	岸崎文學士	佐藤文學士	福山文學士	安藤文學士	久保文學士
近松文學士	幸田文學士	白河文學士	明王	ス	明	頓	帝	ス	飛	祖	ト	ル	ク
蘇子迦	子	孟	成	吉	思	汗	子	汗	子	汗	子	汗	子
酒井文學士	十時文學士	中村文學士	土井文學士	永井文學士	太田文學士	松岡文學士	赤松文學士	布松文學士	高木文學士	名尾文學士	森山文學士	谷野文學士	中内文學士
柿山文學士	中大路文學士	熊谷文學士	三好文學士	ニ	フ	ラ	ユ	ニ	フ	ラ	ユ	ニ	フ
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス

●錢五拾參圓壹册貳拾 ●錢拾七册六 ●錢參拾金册壹 ●宛錢四册壹稅郵▲錢拾八圓參册六卅部全 ●頁餘拾四百編每册六拾參部全

町本館文博京東

旅順の巻

▲第拾壹編
△挿書……大羽君書
旅順の包圍……一戸砲臺の由來
勸降の軍使……最後の總攻撃
第一回總攻撃……決死の白樺隊
海峽の占領……嗚呼二百三高地
「ステツセルとクロ」……東鷄冠山の陥落
二子山と鉢巻山……旅順の開城
附録 旅順陥落の歌●乃木司令官●惜哉
軍國 松村將軍●海陸の一致●大島將軍
讀本 仁俠●竹筒爆薬の發明●吉田中尉の戦死●大膽なる水雷襲撃

奉天の巻(上)

▲第拾貳編
△挿書……金仙君書
敵の中立地横行……蘇麻堡の亂撃
牛莊の陥落……増援隊の運動
牛莊の回復……黒溝臺の回復
種田枝隊の退却……大戦の準備
老田部の苦闘……清河城の占領
依田部隊の苦闘……清河城の占領
附録 立見將軍●苦戦の津川隊●鬼小
軍國 原文平●支武門の勇將●陣中の
讀本 握手●機轉の大紙薦●十倍中隊長●名譽の三勇士

奉天の巻(下)

▲第拾參編
△挿書……秋香君書
最右翼軍と右翼軍……右翼軍の急進
高臺嶺の激戦……最左翼の迂回運動
崩れ始めた敵の足並……秋山騎兵團の活動
左翼軍と中央軍……奉天占領と敵の敗北
萬寶山攻撃……我が追撃と鐵嶺占領
李官堡の難戦……滿洲軍の大成功
附録 嗚呼前田中將●負傷した今橋少
軍國 長●大越少佐の自殺●吉岡聯隊
讀本 歌●紀念の號笛●第四軍追撃隊
偵察隊●大名譽の一兵卒●挺進隊と

日本海の巻

▲第拾四編
△挿書……永年君書
婆的艦隊の出航……敵艦隊の敗走
敵の計畫變更……片岡艦隊の勇戦
我が十二分の準備……信濃丸と和泉艦の攻績
皇國の興廢此一戦にあり
第一戦の成績……空前の大成功
附録 三須司令官●千代田艦長宮殿下●
軍國 大海戦の殊功者連艦長●神雄東郷
讀本 平八郎●日進の花●戦門前の演説●片脚の勇士●日本海々戦の歌

樺太の巻

▲第拾五編
△挿書……沖舟君書
樺太の由來……北部樺太軍の行動
幕府の樺太談判……アレキサンデルス
攻撃軍の上陸……キーの占領
コルサコフ其他の占領……我軍の追撃
ダアリ子エの森林戦……我軍の急追撃
敵將以下の降服……敵軍の降服
附録 外交家松平石見守●サガレン陸
軍國 戦隊●間宮林蔵の偉功●原口司
讀本 今官●小泉參謀長●密林戦の機
世談 性●雄辯將軍●出羽司令官の出

凱旋の巻

▲第拾六編
△挿書……春汀君書
沿海州の偵察……我が構和條件
北韓軍の活動……構和の難關
洪水中的の滯陣……國民の激立
會寧方面の攻撃……大廟御參拜
平和風の由來……滿洲軍の凱旋
附録 御聖徳の一斑●小村全權大使●
軍國 韓國統監●噫廉潔將軍●凱旋土
讀本 産の怪獸●東郷大將の徳望●寺崎上等兵水中の働き●凱旋の歌

220
579

大和田建樹君著

日本歴史譚

我邦古來より現今に至るまでの歴史中最も著名なる事蹟にして幼少年諸君の忠君愛國の思想を養成せしむるために著者が平易流暢の筆を以て本譚を記述されたるもの全編二十有四編皆此れ金玉の文幼少年諸君座右の友として立志の端を開き兼て歴史を知らしむ實に破天荒の珍書なり

- | | | | |
|----------|---------|----------|----------|
| 第壹編 日本開闢 | 山田敬中君書 | 第拾參編 豐太 | 閣小堀軼音君書 |
| 第貳編 畝傍 | 山村丹陵君書 | 第拾肆編 七本 | 鎗筒井年峯君書 |
| 第參編 三韓征伐 | 寺崎廣業君書 | 第拾伍編 關ヶ | 原高橋松亭君書 |
| 第肆編 聖德太子 | 水野年方君書 | 第拾陸編 水戸 | 黃門水野年方君書 |
| 第伍編 菅公 | 梶田半古君書 | 第拾柒編 四十七 | 士中川葦舟君書 |
| 第陸編 九郎判官 | 筒井年峯君書 | 第拾捌編 平田 | 篤胤遠藤耕溪君書 |
| 第柒編 曾我兄弟 | 尾形月耕君書 | 第拾玖編 櫻田 | 門外小峰大羽君書 |
| 第捌編 惡七兵衛 | 水野年方君書 | 第貳拾編 七卿 | 落池田輝方君書 |
| 第玖編 相模太郎 | 山中古洞君書 | 第貳拾壹編 彰義 | 隊小山光方君書 |
| 第拾編 楠公 | 小林永興君書 | 第貳拾貳編 城 | 山宮川春汀君書 |
| 第拾壹編 日蓮 | 武内桂舟君書 | 第貳拾參編 平 | 壤永井寸昂君書 |
| 第拾貳編 大塔 | 宮歌川國松君書 | 第貳拾肆編 威 | 海衛小山光方君書 |

全部貳拾四冊
大判洋裝美本

●正價

壹冊金八錢 ●六冊金四拾五錢 ●拾貳冊金八拾五錢
廿四冊金壹圓六拾錢 ▲外に郵税壹冊貳錢宛

巖谷季雄君著 和田英作君畫
伯林土產戀の繪葉書 全一冊

一名留學生氣質
洋布上製中判四百六十頁

正價金壹圓
郵税金八錢

巖谷小波君著

小洋行土產 全二冊

洋布上綴中判新形八四〇頁
正價一冊金壹圓貳拾錢 郵税十二錢

男波女波 全一冊

正價一冊金四拾錢 郵税八錢



